MILK☆CANDY

日月あきら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＩＬＫ☆ＣＡＮＤＹ

【Ｎコード】
Ｎ４２９７Ｘ

【作者名】
日月あきら

【あらすじ】
バンドＭＩＬＫ☆ＣＡＮＤＹのギター兼ヴォーカルであるＫＩＲＡこと、高梨きららは校則の厳しい県立桐谷高校２年生。二重生活が学校にばれないようにと大人しく学校生活を送っていたのに、なぜか風紀委員長である同級生、辰巳賢吾から風紀委員副委員長に抜擢され…天然鈍感元気娘が腹黒溺愛男に捕獲されていくお話です。

1－1

眩しくて熱いライトに煽られるように、音楽に乗せてギターをかき鳴らして歌いまくる。
今日もトレードマークのツインテールがご機嫌に揺れ、真っ赤な四角いフレームの眼鏡越しに、握りこぶしを振り上げるファンで溢れた観客席を見つめる。
体が動くままに踊り狂って、私たちのリズムに乗り、私たちにだけ惹き付けられる観客を煽り続ける。
私が舞台で跳ねると、客席も一斉に跳ね上がる。
そして私の気持ちはみんなと一つになって、空高く舞い上がっていく。

バンドのメンバーとの一体感を観客と一緒に味わえた時の爽快感は、何物にも変えがたい。
この感覚、もう手放すことなんて考えられない。

「ＫＩＲＡ～っ！」
「ＫＩＲＡ！サイコー！！」

割れんばかりの拍手と声援に、思いっきり笑顔で手を振り上げる。

『また私たちに会いに来てね！
ばいばぁ～い！！みんな、アイシテルよーっ！』

魂を込めた私たちの音楽と歓声がライブハウスいっぱいに響き渡り、
そして今日もその幕が閉じる。
その瞬間、私の魂は最高の幸福を堪能する。

私は興奮冷めやらぬ観客席に一つ投げキッスをして、ゆっくりと舞台から引き上げた。

ライブがはねた後の、けだるい雰囲気が好き。
体中の水分が出ていったんじゃないかって思えるほど大量の汗を体中から湧き上がらせた後、キンキンに冷えたミネラルウォーターを一気飲みすると、わずかに高ぶった感情も火照った体もクールダウンされる。
そしてじんわりと残る、感動。
きらきら光る宝石が私の心の中にころん、と生まれて、秘密の宝箱にそれをそっとしまう。

ライブの度に増えていく宝石を思うたび、心のそこから思うのだ。
バンド、やっててよかったなぁ〜！って。

お姉ちゃんが中心になってやっているバンド”ＭＩＬＫ☆ＣＡＮＤＹ”のメンバーに引きずり込まれて、早3年。
結局私はすっかりこの道にはまり込んでしまった。
絶対に人には知られてはいけない、茨の道だというのに。

お姉ちゃんが中学を卒業したと同時に、このアマチュアバンドは結成され、活動を始めた。
中学校の文化祭で幼馴染同士集まって演奏したときの爽快感が癖になり、高校進学が決まると同時に本格的に活動を始めたのだ。
冗談半分で受けた親戚のライブハウスでの前座が思いのほか好評で、あれよあれよという間にそのライブハウスの人気者になっていた。

お姉ちゃん達はとにかく凝り性なので、妥協と言う言葉を知らない。
だから音楽は本当にすごくて、評価されるのも頷けるけど…世の中どうなるかわからないって真剣に思う。
女子高生の集団が、たとえひとつのライブハウスだけのことだとしても、人気絶頂のアイドル状態になるんだから。

メンバーはドラム担当の私のお姉ちゃんＡＧＥＨＡの他にベースのＫＡＺＵこと近藤和江、シンセサイザーのＫＵＭＩこと梶久美子、そしてギター＆ヴォーカルの私、ＫＩＲＡの４人。
私は高校生だけど、３人は現在２０歳、大学２年生だ。

３年前まではＭＩＮＡこと南さんがヴォーカルとギターを担当していた。
かわいらしい容姿と甘い歌声が人気だった彼女は、父親の転勤で海外に引っ越すことになってしまい、泣く泣くバンドを引退したのだ。
そこで白羽の矢が立ったのが、リーダーの妹である私。
お姉ちゃん達の影響でギターをしていたことと私の声質が南さんに似てたから…と言うのが選抜理由だったらしい。
当時ギターと歌が好きだってだけで一緒にバンドやることになんて興味もなかった私に、みんな寄ってたかって泣きついてきた。
「お願い！私たちを助けると思って～っ！！」って。

でもあれ、絶対に芝居だったと今なら確信を持って言える。
私はお姉ちゃんたちの策略にはまったのだ。
中学生で、しかも初めての受験が控えていたのに。

「あんた、頭いいから大丈夫よ！」と難関を目指す妹の心配を笑顔で流した姉は、その流れのまま私をＭＩＬＫ☆ＣＡＮＤＹのギター兼ヴォーカリストの道にまで押し流そうとした。
あまりに押しが強すぎるお姉ちゃんに困惑した私は「お父さんとお母さんがきっとダメだって言うよ？私、中学生だし」と、両親を盾にやんわりと断った。
なのにお姉ちゃんは私の知らぬところで親と直談判し、許可までもらってしまった。
…しかも”これまで通り成績は学年１０位以下には落さない”と”模試では県立桐谷高校Ａ判定以外取らない”という条件まで勝手に取り決めて。

結局、苦労するのは私で、お姉ちゃんはおいしいトコ取りというわけだ。
腹が立つものの、笑顔で「さぁ、これで問題はクリアしたわ！」と笑う悪魔なお姉ちゃんに反抗することも出来ず…。

で、現在に至るというわけ。

確かに成績も落さずに済んだし受験に失敗する事はなかったけど、心中複雑だった。
だって、私がどれほどあわただしい毎日を送っていることか、お姉ちゃんは絶対にわかってない…大学で要領よく楽しく生活している

お姉ちゃんを見ていると、正直腹が立ってくる。
私がどんな思いで”オフの生活”を送っているかっ！！
…なんて怒鳴ってみても、きっと風が吹いたぐらいにしか考えてくれないに違いない。

…っと。
そうそう、言い忘れてましたが。
私の本名は高梨きらら。もうすぐ１７歳。
県内では有名な進学校である県立桐谷高校の２年生。

進学校ってたいてい校則が緩いものなのに、この学校、私が入学した年から突然校則が厳しくなり、いまや県下で１，２を争う程になってしまった。
生徒の自主性を重んじる校風とやらで、生徒で組織された風紀委員が校則違反に厳しく目を光らせているという不思議な学校だ。
自主性を重んじるのならば、校則なんてなくしちまえ！と吼えていたんだけど…。

…けど、この校則を作らしめた原因がわが姉とその友達だったと聞いて…何も言えなくなった。
２年前にこの学校を卒業した姉とその友達は、校則のない自由な校風を後ろ盾に、かなり自由奔放に高校生活をエンジョイしていたそうだ。
姉達に散々振り回されたことに懲りた教師陣が服装等の風紀の乱れに対して神経質になったらしく、２年後にはもの凄く厳しい校則が完成し、施行するに至ったというわけだ。
校則のあってないようなところに魅力を感じて入学してきた私たち

の学年の生徒にしてみれば、騙されたようなものよね…。
その責任の大半が身内にあるんだなんて、申し訳なくて言えるわけがない。

とにかく、私が本当の自分を隠して学校生活を送っているのは、姉の若気の至りが原因と言うわけだ。
まぁどっちにしろ、本格的なバンド活動を公に認めてくれる学校など、滅多にないだろうけど。
無事に卒業したい私は裏家業がばれないように、学校では目立たないように大人しく地味に生きていた。

それなのに。

…それが2年生に進級した途端とんだ災難にあうだなんで、一体誰が考えただろう？
誰も思わないわよ、そんなこと！

日常生活におけるストレスの大半を作り出している学校生活を思い出し、ふぅとため息をついた。

「あら？きらら、悩みごとぉ？」

お姉ちゃんがお気楽丸出しにケラケラ笑いながら声をかけてきた。
誰のせいだと思ってるんだ、誰の？
怒りをぶちまけたところで、蚊に刺されたほどの刺激も感じないんだ、この姉は！

「…明日、委員会なの。だから定例練習、パスだからね？」

「おやおや、例の？不機嫌なはずよねぇ～」

がんばれ～！と色気もへったくれもなくがははと大口開けて笑う姉に、少々殺意を抱いてしまうのは仕方ないと思う。

ホント、他人事だと思って…

委員会のことを考えると頭が痛いけど、サボるわけにはいかないし…なんて考えていると、ため息ばかりが零れ落ちた。

1―2

「今日の授業はここまで」

授業の終わりを知らせる先生のお決まりの台詞とともに、６時間目終了。
６時間あった授業が全て終わり、ようやく肩の力が抜けた。
でも今日は…これからが勝負だ。

「きらら、今日委員会？」
にっこり笑いかけてくる、明るく朗らかな女の子。

彼女は田辺桃花、通称・桃ちゃん。
私の幼馴染で大親友でもあるクラスメートで、私の二重生活を知る校内唯一の女の子だ。

桃ちゃんはとにかく明るくて気さくでやさしくて可愛くて、眩しいほどに輝いている。
学校で内気・陰気・近寄りがたい人間を演じ続けている私にとって絶好の隠れ蓑になってくれている。
大概の人間は彼女のまばゆい人柄や愛くるしい容姿に視線を向けることで、私という人間に注目しないから。
人は見たいものしか見ないし、まぶしい光があれば取るに足らない影になど目を向けない。

こんなアイデアをうまく形にしてくれているのが、私の桃ちゃん。
頭脳明晰で情報収集能力に長けた策略家の彼女は、陰になり日向となり私を助けてくれているのだ。
そんな彼女をしても、今回私に降りかかった不幸は防げなかったのだけれど。

それは、進級してからすぐの４月中旬。
二人で仲良く風邪を引いて学校を休んでしまった、翌日に明らかになった事実。

なんと前日の委員会決めで、桃ちゃんはクラスの学級委員長、私は風紀委員に選ばれていた。
休んでいたため抵抗する機会を奪われた挙句、決定事項のため覆すことも出来なかった。
桃ちゃんは毎年学級委員長に選ばれているから、これはもう人徳と言える。
けれどクラスに…いや、学校に友達らしい友達もいない私の場合、事情は全く変わってくる。

つまり、無抵抗な状態であるにもかかわらず、誰もが絶対に避けたい嫌な役員を押し付けられたということだ。
こういう時、みんな無情だと思う。

しかし、そんなことで嘆いてばかりもいられない。
私は自分をよしよしと慰めながら、ドナドナ気分で風紀委員の集合場所である教室に向かった。
泣く泣く出席した第一回風紀委員会で、これ以上不幸が訪れないよ

うにと、とにかく目立たなそうなところに陣取った。
しかし、うまくいかないときは、運命の神様にも見放されるのだろう。
自分よりもでっかい人の後ろでこそこそしていたにもかかわらず、事前に生徒会から指名を受けていた風紀委員長から、副委員長の指名を受けてしまったのだ。

極力関わることなく過ごしたかった組織に居座ることになってしまった挙句、副委員長って…。
入学前から校則に激しく違反している人間が、副委員長って…。
一体何の因果か？はたまた呪われているのか？
衝撃が大きすぎて、固まったまま言葉一つも出なかった。

そして憂鬱だった高校生活は、より一層憂鬱なものへと変わってしまった。
特に今日のように定例委員会のある第2、第4木曜日の恐怖といったら！
仏滅、三隣亡、13日の金曜日が一変に来たような気分よ。
一度真剣に厄払いでもしてもらった方がいいのかもしれない。

桃ちゃんと別れて委員会が行われる生活指導室へと向かうと、まだ早い時間だというのに委員長が1人で座っていた。

”コイツのせいで私はっ！！”見かけるたびに睨みつけてしまうほど、私のコイツに対する評価は地の底に落ちている。

辰巳賢吾。

背が細高く銀の細いフレームのめがねをかけたコイツは、賢そうな名前の通り学年一優秀な人間だ。
しかも神に愛されすぎたのか、顔もよければ運動神経もいいらしい。
同じ2年生とは思えないほど大人びた落ち着きがあるといえば聞こえはいいが、無表情で感情表現に乏しく、一体何を考えているのか全くわからない。
笑うことすら滅多にないコイツが女生徒から”氷の貴公子”などと呼ばれて、その人気を欲しい侭にしていることが不思議でならない。
…コイツが人気者だったら、なんでもっと女子が大挙して風紀委員にならないのだろうか？
案外と、この桃ちゃんにもらった情報もガセかもね。

そんなことはさておき、ヤツは人に否と言わせない雰囲気を持っている。
頼みごとをされるとそれはまるっきり強制に聞こえると言うか、拒否の言葉を吐くことを受け付けない空気を持っているというか…

そう、正直に言うと。
私はコイツが怖い。

「こんにちは高梨さん。今日のプリント、机に置いていってくれる

？」

低くて深い声が響いた。
私の中にあるはずのささやかな反抗心を無視して、びくびくっと素直に震える私。
…悔しい。
口の中でもごもごと了解の返事をして、わたわたと仕事に取り掛かった。

今日の議題は2年生の風紀の乱れについて、だそうだ。
委員会のメンバー全員がそろったところで、定例会が始まった。

プリントに書かれた議題にそって、委員長・辰巳が話をする。
悔しいことにどこにも付け入る隙がないぐらい内容はわかりやすく、低く響く声は色気すら感じるほどにきれいで耳障りがいい。

「入学したばかりの1年生、受験がいよいよ目前となってきた3年生と異なり、
2年生は最も気の緩みやすい学年と言えます。
実際、現2年生による校則違反も、彼らが1年生の夏休み終了後から徐々に
増え始め、最近では違反者の6割が2年生であると言う結果も見られます。
新しい校則の定着は、校則が定められたと同時に入学した現2年生の行動に
かかっているといっても過言ではありません。
…ということで、朝の校門指導の強化を図ることになりました。

その日程、具体的内容についてはプリントにある通りです…」
見ると、朝校門に立って服装違反者に警告せねばならない立ち当番の日程が書かれていた。
じっと見てあることに気付く。
ちょっと…待ってよ……っ！

「これまでは週1回月曜日のみだったのですが、来週からは週2回、月曜日と木曜日に行います。
当番表と立ち番の日程を昨日までに至急提出するようにとのことだったので、
僕の方で適当にペアを決め、日程を組みました。
男女ペアにしているのは、違反者への対応は同性同士で行うためです。
もし朝都合がつかない場合は、各自で日程の調整をし、
変更を僕の方に連絡してください。」

ダメだ…何にも頭に入ってこないぐらいパニクってるよ、私。
いやいや、それよりさ……ことごとく辰巳とペアって…ドウイウコトですか？
一体どんな法則で決めたワケ？

もしかしてコイツ、何か勘ぐってんじゃないだろうか？
私は淡々と議題を進める辰巳をちらりと見上げた。
もちろんその横顔からは、何も読み取ることが出来ない。

私の裏家業について…まさか、ばれてる？とか？
…いや、いやいやいや、それはないはず。

心臓がごっごっとありえないほど激しい音を立てる。
緊張と恐怖で貧血起こしそうだ。

俯いたまま嵐が過ぎるのを待った。
嘘だと言ってくれ、などとはもう言わないから。
せめて早く終わってくれ…私を安心してくつろげる我が家へ帰してくれ…それだけを一心に願った。

もうこれ以上の刺激には耐えられそうにない。

それなのに、神様はちっぽけな私に1ミリ立方メートルのお情けもくださらなかったようだ。

次に辰巳の口から語られた議題に、私は思わず上げそうになった悲鳴を喉の奥に無理やり押し戻さねばならなかった。

「最近、うちの生徒が夜の繁華街で見かけられるという噂が広がっています。
一部の生徒がライブハウスやクラブに頻繁に通っているとの情報もあり、
先生方も危惧されてました。
夜の繁華街では犯罪に巻き込まれるケースも多く、学校サイドでも何らかの
策をという動きも出てきました。
すでに先生方による抜き打ち補導については決定してますが、生徒側から
積極的にこれらの施設への出入りを止めるように促す必要があり

ます」

ぐはっ！！！！

何らかの策を打ち立てられた日には、私、一体どうなっちゃうの？
膝に乗せた握りこぶしが、知らず知らず震え始める。

確かにうちのライブにも来てるわよ、ここの生徒たちが。
桃ちゃんだってよく観に来てくれてるし、一昨日だって帰ろうと思って裏口を出ると、学校で見たことのある生徒４人組に出くわしてびっくりしたところだもん。
誰もヴォーカルのＫＩＲＡが私だとは気付いてないけど…高校生になってライブハウスに出入りする子が増えたのは事実。
私たちの音楽を気に入ってくれて聞きに来てくれるのはうれしいんだけど…それだけリスクは高くなるわけで。

でも。
何らかの手を打つとはいえ、その手は限られてるだろうし。
一応私は保護者が付いてるし、学校にバンドやってることさえばれなければ問題ないわけだし。
案外禁止令なんかが出たら、かえってうちの生徒が来なくなってばれるリスクが低くなるかもしれないし。
悪いことばかりじゃないかもしれない…。

どうしようもない不安など、握りつぶすに限るのよ！

結構自分が楽天的だったって事に今気付いた。

何とかなるでしょ。

何とか、ね。

私は不安材料についての検討を強制的に終了し、頭から締め出した。

2－1

…やっぱり、相当面白いヤツだよな…コイツって。

オレは隣にちょこんと座って、人知れず百面相を披露している女生徒を盗み見た。
彼女の名前は高梨きらら。
同じ2年生だが、文系コースを選択している彼女とは同じクラスになることは、今までもこれからもない。

1学年5クラスしかない学校だが、大学進学に重きを置いた進学校なので入学当時から理系、文系と進路別にクラスが分けられている。
ちなみにオレは大学も理系を目指しているので理系コースである4組、彼女は文系コースである2組だ。
教室も3階と4階に分かれていて結構離れているし、選択科目も違うため、学校内でも滅多に出くわすこともない。

ましてや、高梨はどちらかというとかなり地味で大人しいタイプ。
人付き合いが苦手なのか、交友関係を広げるタイプでもないし、部活動に積極的に参加しているわけでもない。

…オレの場合、彼女の事はとやかく言えないほど事なかれ主義で生きているが、それでも妙に注目されている。
極端に寡黙な人間も人目につくものらしい。

とにかく、言っちゃ悪いが大抵の生徒にとって彼女は印象の薄い存在だと思われる。
おそらく2年生になったというのに、同じクラスにもきっと彼女の名前と顔が一致しない、もしくは「え？そんなやついたっけ？」と本気で驚くやつがいるにに違いない…ぐらい印象に残らない女だ。
けれどオレはそんな彼女を1年の頃からずっと興味を持って見つめ続けていた。

小さい頃からオレはとにかく無表情で無口な人間だった。
それはきっと愛情が溢れ過ぎてたれ流れている両親の教育の賜物だと確信している。

うちの両親はとにかく仲がよくて、家にいれば四六時中磁石のようにべたべたくっついているようなやつらだ。
しかも、一人息子のオレにまでそんな濃厚な関係を求めてくる。

…母親は、まだ仕方がないと思う。
百歩譲って理解は示そう。
けれど父親はいただけないだろう、父親は。

母さんがいないからという理由で「お前は美知さん似だからなぁ～」と言いながら抱きしめてきた父親を張り倒したのは、確か一昨日のことだ。
身長１７８センチにまで成長した息子に己の妻の影を見るほど欲求不満なのか？…その問いは返答が怖くて聞けたためしがない。

そのくせ母さんがオレに抱きついてるのを見ると、「オレの美知さんにっ！！」などと嫉妬全開で食って掛かるのだから始末に終えない。

両親が不仲よりは仲良くやってくれた方がいいのだけれど、正直、我が親ながら付いていけない。
ついでに言わせてもらえば、結婚して既に１８年の歳月を共に過ごしているというのに、未だに母さんにでれでれと鼻の下を伸ばしている父さんを見ると、オレは絶対にこんなアホ面を世間様に晒したくないと身震いしてしまう。
父親のようにオレも成長とともにあんなしまりのない顔で惚れた女にへばり付くようになるのか？
という不安は、小学生のオレにとって最凶の恐怖だった。

父親が反面教師となってくれたお陰で、オレのポーカーフェイス人生はスタートした。
そして、決して恋愛すまい、女には近づき過ぎないようにしようと幼心に固く誓ったのだ。

ある意味不幸な子供時代だが、これにはこれで利点があった。
決して人嫌いではなかったオレは、友達の輪の中に入っても、聞き役に徹していた。
あまり人の関心を自分に集めたくなかったからだ。
けれど、人は自分の話をじっくりと聞いてくれる人にはとことん語りたくなるもの。
そのうち話し好きなやつに捕まるようになり、延々と自慢話やら噂話なんかを聞かされるようになった。

それはそれで面白かったのだが、あまり退屈な話ばかり聞かされっぱなしのときもあり、そんな時は飽きてくるので、そのうち話をしている人間やその周囲を観察することに楽しみを見出すようになった。
人間ウォッチングと言えば聞こえはいいが、あまり褒められた趣味ではない事は確かだ。
両親という不可解な人種を持ち、その行動の原因を探るうちに身についてしまった習性でもあるのだから、不可抗力と言えなくはないと思ってはいるのだが。

輪の外からじっくりと観察すると、人間関係の複雑さに驚かされ、人間というものの多様性や可能性に感心することが多々ある。

じっくり観察するためにより無口になり、こちらは”何考えているかわからない人間”のレッテルを貼られることとなったが、それは些細なことだった。

こんなオレが高校入学後、目を付けた不思議人間ナンバーワンが高梨だったというわけだ。

高校に進学して無口ながらも聞き上手だったオレは、同じ中学校から進学した友達がいるわけでもないのに、あっという間にクラスの男連中とそれなりにいい関係を築いていた。
その中でも特に一緒にいる機会が多くなったのが、クラスの中でも盛り上げ役に徹することを我が使命とでも思っているんじゃないか？と思われるほどのお祭り男３人衆…田中、斉藤、田神だった。

もともと理系クラスであるため、このクラスの女子生徒の数は３５人中８人と圧倒的に少なかった。

しかしお祭り男衆は受験から開放されると同時に己に忠実に異性に対する欲望をあからさまに開放したらしく、毎日毎日飽きもせず、同級生はもちろんのこと先輩、後輩、他校生、果ては先生からまで好みの女を漁り、その触手を伸ばそうと躍起になっていた。

大勢の女が彼らの審美眼の篩にかけられ、最終的に彼らの憧れの華の座を射止めたのが、同学年の田辺桃花だった。

もちろん、オレはさして興味はなかった。
けれどオレを田辺ファンクラブ風モテナイ男の集会に引きずり込みたい3人は、彼女の姿がちらりと見える度にしつこく彼女を指差し、その魅力についてくどくどと語って聞かせた。
ただ単に無愛想なだけなのに、女たちはなぜかオレを寡黙で陰のあるワイルドな優等生として注目しているらしく、しかも女に全く興味がないオレが彼女を評価することで田辺さんを独占されることもなく自分たちに箔がつくと思ったらしい。

全く理解できない思考回路だ。

もともと争いごとに巻き込まれるのを極力避けるように生きてきたオレは、一度鼻息荒く彼女を語るあいつ等を無視してうちの両親以上にしつこく絡まれて以来、大人しく彼らの薀蓄に耳を傾けるようにしていた。
これであいつらのしつこい勧誘を受けずに済むならば、それに越したことはない。
…まぁ、そのおかげで、田辺さんの話を数百倍聞かされたような気がするが。

そして確か、やつらに促されて田辺さんという存在があそこにいる

なと2度目に認識した時だ。
彼女の影のようにくっついている女生徒に気付いたのは。

2―2

3人の言葉を借りれば”花が綻び咲くような笑顔”が印象的な田辺さんの隣で、まるで真っ黒な黒子の衣装を着た影のごとく目立たないように付き従う彼女は、オレの目からみればかなり奇異な存在に見えた。
肩甲骨に届くか届かないかぐらいの茶色がかった少し癖のある髪で顔を覆い隠すように俯き、少し猫背気味に歩く姿。
表情すら見えないため、根の暗そうな印象だけが強烈である。
しかもなまじ隣に輝かんばかりの笑顔があるだけに、その存在感はあっさりと消し去られている。

確かに目立ちたがらない、生まれながらの性格で大人しい地味な子というのはいるものだ。
けれど長年培ってきた人間ウォッチャーの勘が、オレに囁き掛けるのだ。
彼女には隠された何かがあるに違いない、と。

3人に彼女についてさりげなく聞いてみたが、「そんなヤツ、いたか？」「知らねぇ」「興味ねぇな」と全く使えない返事ばかりだった。
だからこそ、余計に彼女への興味がむくむくと湧き上がっていった。
なぜ彼女はそこまでして己の存在を消す必要があるのか？
考えても解けない謎だった。

以来オレは「田辺さぁ～ん！」と身もだえしている3人を冷めた目で見つつ、彼女の隣に影のように寄り添う女生徒を目で追っていた。

偶然田辺さんたちとすれ違った時、彼女が「きらら」という珍しい名前なんだと知った。
だから中間テストの成績表貼り出しで、文系1年生の中で8位の成績を収めている”高梨きらら”が彼女と同一人物であると突き止めるのは簡単なことだった。
才色兼備と言われている文型学年1位の田辺さんと引けを取るわけではない。

なのになぜ、彼女はいつも俯いているのだろうか？
1年の頃から風紀委員に祭り上げられていたオレは、校門指導当番の時、業務にかこつけて登校する彼女をじっくりと観察した。

もしかして顔にコンプレックスがあるのか？と思ってみたけれど、時折おどおどしながら顔を上げるその表情はまずまず整っているように見えた。
むしろかなりかわいい部類に入るのではないだろうか？
何か人に言えない悩みを持っているとか…？
時折意識が朦朧としているのでは？と思うほど眠そうに校門を潜り抜けることがあったが、それは眠れないほどの悩みを持っているというよりは、純粋に睡眠不足のようにしか見えない。

彼女との接点が少ないのだから仕方ないのだけれど、わからないことばかりが増え、日ごとにもやもやとした苛立ちが募っていった。

そして、オレの高梨観察についに光が射したのが、去年の９月のことだった。
時間つぶしに寄った図書室に一人で座っている彼女を見つけたのだ。
図書室の中でも人目につきにくい彼女の席からは、放課後の校庭で練習する運動部の様子がよく見えた。
彼女は長い髪の隙間からちらりと外を見て、ふと思いついたように机に広げられたルーズリーフにさらさらと文字を書き連ねていた。
教科書や問題集の類が見つからないところを見ると、どうやら勉強しているわけではなさそうだ。
さらさらと書いていたかと思ったら、突然ぐちゃぐちゃと線を引いて書いた文字を消してしまう。
少しイラ付いたようにとんとんとシャーペンの先で机を叩き、今度はシャーペンの頭を唇に押し当てて…どうやら作業は難航しているようだ。
それにしても、色の白い彼女の指はほっそりとして長かった。
幼そうなやわらかな曲線はオレのものとはずいぶん違って見えて、何故か胸がドキドキしてきた。
と、その時。
ついに我慢も限界とばかりにシャーペンを机に放り投げた彼女は、その手で前髪を乱暴にかきあげた。
その瞬間、オレの胸はどきり、とひと際大きな音を立てた。

いつも俯いていたから分からなかったけど、きりりとした眉の上には量が少なめの短い前髪があった。
くっきりした二重の黒目がちな大きい瞳と桜色の柔らかそうな唇は、不機嫌そうに歪められていたけれど、十分魅力的だった。
田辺さんのような可愛さと色気が混在するタイプとは違い、幼いあどけなさがとことん可愛い。

きっとあの3人が彼女の素顔を見たら、心の半分を彼女に持っていかれることだろう。

「きらら？終わった？」男子生徒を虜にしている花のような笑顔で、田辺さんが奥の方の書庫から数冊の本を持って出てきた。

「だぁめぇ～～っ！
ももちゃぁ～ん、どうしよ？いいフレーズが浮かばないーっ！！」

初めて聞いた彼女の声は、ぶーたれた台詞であるにも拘らず清んだソプラノで、ずいぶんとかわいらしく心地よかった。
くすくすと笑う田辺が「大丈夫、間に合うわ」と高梨の頭を撫でると、ごんと音を立てておでこを机にぶつけた。

「きららは崖っぷちに強いから、明後日には素敵な詩が出来てるわよ！
これ、絶対！」

「ほんとに？」と疑わしそうに顔を少し上げた高梨に、田辺は大きく頷いた。
がばっと起き上がった高梨が、満面の笑顔で田辺に抱きついた。

「ももちゃぁ～んっ！ありがとぉ～っ！大好きぃ～っ！！」

正直、驚いた。
まるでお日様みたいな笑顔だった。

きっとオレがここにいることには気付いていないだろう彼女の素の姿は、酷くオレをうろたえさせた。
だからオレはますます彼女の隠された秘密が知りたくなった。

”もし彼女とその秘密を共有できれば、田辺に惜しみなく向けられたあの笑顔を
　オレにも向けてくれるだろうか？”

ふと頭に浮かんだ台詞を慌ててかき消した。
このままでは、オレも両親と同じ穴の狢ではないか。

危険思想だ。
理性よ、蘇れ！

オレは心の中で何度もそう唱えた。

けれどこの日を境にオレの中の彼女への興味は爆発的に膨れ上がり、ついに我慢しきれなくなり彼女との接点を増やしたくて図書室に通ったりもした。
１０回中１回ほどしか彼女を見かける事は出来なかったけれど、図書室の特等席に座る彼女は魅力的で、会うたびにオレの中に目覚めた感情が一体なんなのか自覚させられた。

ここまでくればもう、後退もかなわない。
オレは高梨の前に、彼女は気付きもしなければ喜びもしないだろうが、おとなしくかぶとを脱ぐことにしたのだ。

こんなオレが哀れに見えたのか、神様はどうやら存在したようで、すでに高梨に溺れかけたオレに救いの手を差し伸べてくれた。
指名され逃げられずに引き受けてしまった風紀委員長という肩書きにうんざりして第一回目の委員会に行ってみると、彼女がちょこんと座っていたのだ。

この時強固なポーカーフェイスが一瞬崩れ口元に笑みが浮かんだが、幸い誰も気付く事はなかったようだ。
このチャンス、最大限に生かさなければならないと、オレは瞬時に委員長の権限を行使することに決めた。

「副委員長は、２年４組代表・高梨きららさんにお願いしたいと思います」

この時の彼女の唖然とした顔は、今思い出しただけでも笑える。
大男の後ろに隠れていた自分が、よもや指名されるとは思ってもいなかったのだろう。

そうは問屋が卸さない。

委員会にかこつけて彼女との接点を増やし、彼女にオレと言う存在を認識させることに成功した。
突然接触してきたオレに戸惑い、警戒を隠そうとしない彼女を懐柔するために、次はどんな手を使っていこうか？
野良の子猫を飼いならすようなこの状況に、心がうきうきと弾む。
やっぱりオレもあの両親の子供なんだなぁ～と、しみじみ思った。

降ってわいたこのチャンス。
生かさないオレではない。
覚悟しろよ、高梨きらら。

3

いよいよやってきた、５月２３日。
実は、私の１７回目の誕生日なんだよね～。

ＭＩＬＫ☆ＣＡＮＤＹのヴォーカルになってからずっと、この日はお誕生日ありがとうライブを開くことになっている。
もちろん、今年も。
ライブの後親しい人たちばかりを集めた誕生日パーティを開いてもらうことになっているので、今日はいつもよりちょっとだけ早いスタート。
リハもしたいし、今日は何が何でも早く帰らなきゃ。

…絶対に、何が何でも帰ってやるんだからっ！

私は拳を握り、周囲に人がいないことを確認してから空に向けてふんっ！と振り上げた。

ここのところほぼ毎日のように、あのにくったらしい風紀委員長・辰巳に付け回され、あれこれ用事を言いつけられている。
まるでパシリのようだと思いつつも、気の弱い私は抵抗できたためしがない。

あの、声を荒げているわけでもないのに有無を言わさぬ口調。
下手に出ているようでいて、かなり強引に物事を進めてしまう手腕。
嫌味のない、さりげない気配りと、相手に嫌な印象を与えない立ち回り方。
そして、何を考えているのかちょこっとも悟らせない、あのポーカーフェイス。

散々振り回され、もうすっかり飼いならされてしまったかのようだ。
…あぁ、頭にくる！

こちらが必死になってヤツを避けようとしているのに、本人は私の”こっち来ないでオーラ”を全く感じてないのか、何かと用事を見つけては忍び寄ってくる。
何考えてんのかわからない、いつものポーカーフェイスで。

朝の校門指導当番だけじゃなく、委員会前の打ち合わせだとか、指導日報を取りまとめて資料を作成するだとか、果ては私からすれば”勝手にやってよ！”とでも言いたくなるような些細な相談事やら委員会資料のホッチキス止めまで、一人で出来そうなことまで一緒にやろうと暗に命令してくる。

それだけじゃない。
最近では用事があろうがなかろうが、何かと話しかけてくるようになったのだ。

その度に、後ろ暗い生活をしている私の心臓はきしきしと軋んでし

まう。
なんか逃げられないネタ捕まれたんじゃないか？…なんて。
ま、多分、それも取り越し苦労だとは思うんだけどね。
９割の確立で、アイツの目当てもいつも私の隣にいてくれる桃ちゃんだろう。
大概の人間は私という存在にすら気付かないのだけれど、それでも若干名気付いた男の子は桃ちゃんにお近づきになりたくて声をかけてくることがあったりする。
女の私の目から見ても桃ちゃんは魅力的で、そうやって男の子達に聞かれるたびに
”キミ達ももちゃんの素晴らしさが分かるか！”と心の中で喜んでみたり、
”でも、キミ達のようなやからには、大切な桃ちゃんを渡したり出来んぞ！
男磨いて出直して来い！”と親父のように呟いたりしているのだ。
青春って、素敵。
…でもさ。
何故か辰巳の野郎がそんな男の子達と同じなのかと思うと、なんだかどこか複雑な気分。
心に変な引っ掛かりがあるというか、なんというか…。
ヤツのキャラじゃないって感じが居心地悪いのかねぇ、私？
それよりも、裏があるという直感と言うかなんと言うかが常に私の頭の隅っこをざわざわさせるのだ。
…嫌な予感ってヤツ？

そんなこんなで、放課後、１週間のうち3～4日はやつに呼び出されるようになり、私の生活は輪をかけて忙しくなった。
バンド活動はもちろんのこと、両親との約束を守るべく勉強もしてるし、学校への提出物もちゃんとがんばってるし…よく体が持つなぁ～と私もびっくりしてるもの。

それもこれも、私を励まし、支えててくれる家族や友達、それにファンのみんなのお陰だよね。
辰巳の野郎には、決してこの苦労はわかるまい。

今日もライブ、がんばらなきゃ！
来てくれたみんなが幸せな気分になって帰れるように。

「きらら、何にガッツポーズ？」
「あ、桃ちゃん！」

職員室に用事のあった桃ちゃんを待ってたんだった。
すっかり自分の世界に入り込んでいただけでなく、ガッツポーズまで…恥ずかしいったらない。

「で？その意気込みは今日のライブに向けて、かな？」

ぱちん、と可愛くウィンクする桃ちゃんに、へへへと笑って見せる。
今日は桃ちゃんも来てくれるんだ。
だからしっかりばっちり、いいとこ見せなきゃ！

「そなの～。桃ちゃんもしっかり見ててね？」

「もちろん！
舞台の上のきららって、本当にかっこいいって言うか、可愛いって言うか…
見ていてこっちがうれしくなっちゃうもの」
「うれしいっ！私、断然がんばっちゃうっ！！」
「ふふふっ！私はＫＩＲＡのファン第一号だもんね？」
「桃ちゃぁ～～んっ！」

私は周囲に人気がないのをいいことに、素丸出しのハイテンションで桃ちゃんに抱きついた

「…田辺さんは高梨のファン第一号なのか？」

突然頭上から降ってきた声に、私はそのままぴきり、と固まった。
この声は…

「あら、辰巳くん」

桃ちゃんはいつもと変わらぬスマイルで辰巳くんを見上げた。
抱きついている桃ちゃんから感じる脈拍はいつもと変わらぬままで、
心臓をバクバクさせている私が小心者丸出し状態。
…小さい器だ。

「そうなのよ。私、きららが大好きで、きららにご執心なのよ？」
コロコロと笑う桃ちゃんからは、もう何の感情も読み取れないだろ

う。
…そう思えば、辰巳くんと桃ちゃんって似てるような気が…。
なんて考えていると、第二の爆弾が投下された。

「ふぅん…でも、ファンになりたいって気持ち、わかるな。
高梨さんってつい興味を抱いてしまうキャラって言うか
…好奇心をそそられるからな」

辰巳くんはそう言って、あの無表情な口の端で確かに笑みを作った。

オドロキが過ぎたのか、顔までカッと熱が湧き上がった。
焦った私は慌てて下を向いて顔を隠した。
なんだよ、私。
さっきよりも心拍数が上がってるじゃないか！？

「あら？辰巳くんってば、わかってるじゃない…ほんと、侮れないわね？」
「そう？田辺さんこそ、軽く見てたら痛い目に遭いそうな気がするのは
…オレの気のせいか？」
「…面白いわ」

ちらりと見上げた桃ちゃんの顔はすごくうれしそうに、何かたくらんだような笑みを浮かべていた。
…何？

「ところで辰巳くん、きららに何か御用？」

話の流れをさっくりと切り替えた桃ちゃんが、辰巳くんに聞いた。
途端、辰巳くんもいつものポーカーフェイスへと戻ってしまった。
…かなり残念、かも。

「そうそう、高梨、オレ今日用事あるから、昨日の委員会の資料作りは
今日は取りやめだから。
で、仕事たまるのも嫌だし、明日時間があったら午後からでもどこかで
落ち合えないかなぁと思って」
「え？土曜日に？」

私はかなり驚いた。
委員会の仕事をなぜわざわざ休みの日にやるかな？

明日は特に予定があるわけじゃないけどさ、でも今日はライブがあるし、その後は誕生日パーティだし。
家に帰るのも多分深夜だし…。
でも午後から…ん～…どうしよ？
行けない事はないんだけど、ちゃんと起きられるかなぁ？

…って私！
なんで休みの日にまで辰巳に会うことになるのに、前向きに検討するかな？
さっくり断ればいいのにさ、別にしてもしなくてもよさそうな仕事…。

冷静に考えればそうなのよ。
なのに私ってば…行く気で予定考えてるし。
全く流されやすいんだから…しっかりしろ、私！

勇気を持って断ろうと口を開けた途端、辰巳が言った。

「オレ、今日は帰りもかなり遅くなるから、明日早く起きる自信ないし。
２時に駅前のＫ－ｓ　ｃａｆｅでいいよな？お茶ぐらい驕ってやるよ」
「え？ちょっ…ちょっと…」

き～んこ～ん　か～んこ～ん…

いつもの強引さで予定を決めてしまった辰巳に反論しようとした途端、予鈴がなった。

「あ、やべ。オレ次は移動教室なんだよ。
じゃ、高梨、明日２時だぞ。遅れるなよ？」

結局断る隙すら見せず、ヤツはさっそうと去っていった。
ぼーぜんと固まる私の肩を桃ちゃんがぽんぽんとやさしく叩いた。

「…ねぇ、桃ちゃん。何でこうなったの？」
「仕方ないわよ。相手方辰巳くんだもの」

爽やかに言い放った桃ちゃんの言葉に、がっくりと肩が落ちた。

とにもかくにも放課後の委員会活動も避けられたので、私は予定の時間よりも早くライブハウスに到着することが出来た。
それだけでもよしとすべきところだ、きっと。

私たちがいつもお世話になっているこのライブハウス・ＦＡＫＥ！、実はお父さんの弟である喜市伯父さんが経営してるお店の一つ。
小さい頃から、私はこの伯父さんからギターを教えてもらっていた。
お姉ちゃんや私がバンドに興味を持ったのも、喜市伯父さんのお陰。

私たちの両親も、”伯父さんのライブハウス以外では活動をしない”ことを条件に、高校生（…私の場合、始めたのは中学生だったけど）の私たちがこうして舞台に立つことを許してくれたのだ。

こじんまりしたところだけど、昔バンドをやっていた伯父さんのこだわりが随所に生かされている。
しかも、伯父さんのおめがねにかなったバンドしか出演させないという、わがままライブハウスだ。
だから私たちみたいなアマチュアでも出してもらえてるけど、その分伯父さんからの熱血指導は情け容赦ない。

まぁ、そうでないと伯父さんだって商売上がったりだけどね。

私が練習用のＴシャツとスパッツ姿で舞台に参上した時は、既に来ていたお姉ちゃんたちは音あわせのまっ最中だった。
みんなの「はっぴぃばーすでー、きらら！」の声に笑顔で応えつつ、慌てて準備した。
今日もみんな絶好調だ。
私の喉も調子いいし、気持ちいいほどに声がのびていく。
ギターから奏でられる音もまるでダンスを踊っているみたいに、楽しそうに弾んでいる。
きっといいステージになるに違いない。
そう確信した。

リハーサルを終えて、楽屋に入った。
衣装に着替えて、もう一度大切な相棒のギターの最終メンテ。
ステージが始まるまで、あと１５分。
愛飲している特製オリジナルドリンクを飲み、深呼吸をした。

「さ、みんな、そろそろだよ～」

お姉ちゃんの声でみんな一斉に立ち上がった。

4－1

そうしなければ手に入らないというのなら、迷わず強引に事を進める。
オレは昔からそういう男だ。

何もかも計算ずくという訳ではないけれど、なりふり構わずというよりはむしろ冷静に分析し、事を進めていくほうが性に合っている。
その反面、もともとが実は楽観的なタイプなので、強引にでも進めてしまえば案外どうにかなるもんだと思うのだ。
案ずるより産むが易し。
何事に対しても。

その思考パターンに則って、オレは今回もかなり強引に高梨に約束を取り付けた。
約束を破るタイプではない事は承知なので、きっと明日は2時にK's CAFEにやってくるだろう。
…不承不承という顔をしていたとしても。

オレはにんまりと笑んだ。

最初は委員会をネタに高梨を呼び出し、できる限り一緒にいる時間を持つように心掛けることから始めた。
用事は彼女の負担にならないように少し遅い時間ぐらいで終わらせ

て、「下校中に何かあったら大変だから」と理由をつけて自宅付近まで強引に送って行ったりもしている。
おびえる野良猫も、まずは自分の姿や存在自体に慣れさせることから始めなければ、手なずけることは出来ないからな。
そのおかげで、未だ警戒心を持ってオレに接している高梨だったが、有無を言わさぬオレの態度に耐性が付いたようで、今ではしぶしぶながら大概のことには素直に付き合ってくれるようになった。

こうして飼いならしていっているだということに、きっと彼女は気付いていないんだろうな。
一緒にいると、言葉や態度の端々が疑問系なのだ。
”なんで私？”ってところだろう。
そんな彼女が益々かわいいし、そういう理解不能な状況だからこそ、彼女の好奇心は大いに刺激を受けていることだろう。
計画は順調に進行中だ。

田辺に見せるような素顔を見せてくれる事は未だにないけれど、それでも最初の頃よりはかなりリラックスして接してくれているのは分かる。
言葉数だって多くなったし、自分のことを話してくれるようにもなった。

高梨は音楽が好きらしく、音楽の話になるとかなり饒舌になる。
オレの好きなアーティストもよく聴くといっていたし、音楽の趣味が合うのかもしれない。
興奮してしゃべりだしそうなのを慌ててセーブする姿にちょっとがっかりするけれど、でもきっと近い未来に本来の姿でオレに語りかけてくれるに違いない。
そんな日が一日でも早くくればいい…目下、それがオレの願いだ。

とりあえず、強引に誘って接点を増やす。
しばらくはこの作戦で行くしかないだろう。

…それにしても。
田辺桃花…本当に彼女は侮れない存在だ。
彼女に本気でガードされたら、きっともう高梨に近づく事は出来ないだろう。
田辺の様子からして、十中八九コチラの手の内も丸分かりだろうし。
オレを値踏みしているのは、純粋に高梨を心配してのことだろう。
敵にならないことを祈るばかりだ。

明日会う約束をしているとはいえ、今日の放課後は彼女と過ごす事は出来ない。
かなり残念だ。
けれど今日は近所に住む幼馴染との約束がある。
急いで帰って準備しなければ…。

オレの幼馴染・近藤和幸は、所謂”公園デビュー”で知り合ったらしいが、真相は知らない。
もう出会った頃の記憶などひとつもないのだから、どちらにせよかなり古い付き合いといえるだろう。
高校は別々になったけれど、幼稚園から中学校まではずっと一緒。
とにかくよくしゃべるお調子者で、抜けているヤツだが憎めない。

ヤツは中学の頃から従姉妹がやっているというアマチュアバンドに夢中で、２年前に入ったというヴォーカルの女の子に一目惚れしてから片思い歴を更新しているらしい。。
従姉妹に頼んで紹介してもらえば？と言うと、「和ねぇが”お前みたいなお調子者にＫＩＲＡを会わせる訳ないでしょ、ぶぁ～か！１００万年早いよ！”って…」としょげていた。
それでも諦めきれない和幸は、未だに小遣いと相談しながらライブハウスに通っている。

その努力の成果なのか、従姉妹から今日のライブチケットをもらったそうだ。

「このライブ、ＫＩＲＡのバースデーライブでさ～、しかもこの後にある関係者のみのパーティの招待券までくれたんだぜ？
招待客は全員ライブ関係者だし一人じゃつまらないだろうからって２枚くれたんだよ～！」

聞くと、泥酔した従姉妹に呼び出されて迎えに行かされた挙句、酔っ払いサラリーマンにけんかを吹っかけた従姉妹を庇って殴り倒された時のお詫びらしい。
これだけ酷い目に遭ったというのに物につられてあっさり許した挙句感謝までしているなんて…お人よしと言うよりもただの馬鹿だ。
宇宙まで舞い上がってしまうんじゃないか？と思われるほど浮かれた和幸は、そのライブとパーティにオレを誘ってきたのだ。

「賢吾がいたら、心強いし…オレのＫＩＲＡ、紹介したいし！」とのことだった。

正直、どんな音楽をやるバンドか全くわからないし、興味もない。けれどアイツが惚れこんだＫＩＲＡがどんな人物なのか、それだけは若干気にならなくもない。
あの石ころにでも一目ぼれしそうなほど惚れっぽい男がもう２年もＫＩＲＡ一筋だと言い続けているのだから、何がヤツを魅了したのか確認してみたいと思うのは、当然だろう。

まぁ、どっちにしろ、高梨以上に興味惹かれる存在ではあるまい。

そして、ライブ当日。
約束の時間丁度に、和幸がうちにやってきた。
いつも３０分は確実に遅れてくるのに、と正直驚いた。
恋はバカな男を多少はまともな人間に近づけるものなのかもしれない。

玄関を開けてやつの姿を見て、再度驚愕。
バイトして買ったんだろう新品の一張羅を着ている。
はっきり言って七五三か何かのように服に着られている感じがより
バカっぽいが、あえて触れないようにしよう。

…恋の力って、恐ろしい。

ライブハウスに行く途中、ファストフード店に入って軽く腹ごしらえをした。
その間もひたすらＫＩＲＡがいかに魅力的かを延々語っていた和幸。
…うぜぇ。
学校のお祭り三人衆となんら変わりない。

オレはこいつの話を適当に聞き流し、相槌を打つのもめんどくせぇと考えながら、ぼんやりと高梨のことを考えた。

音楽が好きな高梨。
もしいいバンドだったら、いつの日かアイツを誘ってみてもいいな。

ライブハウスに行くなんて、完全な校則違反だ。
校則に則って罰すれば、１週間の謹慎ぐらいはくらいそうだ。
風紀委員長自らが校則を破るなんて、高梨は呆れるだろうか？
きっとオレのことを真面目な根っからの風紀委員だなんて思ってるだろうから、きっと驚くに違いない。
頭の中で企てた小さな計画に、うれしくなってふっと笑った。

和幸は相変わらず、夢見るような瞳で話し続けていた。

連れてこられたライブハウス・ＦＡＫＥ！は、賑やかな繁華街から少し離れた静かな裏通りにあった。

入場を待つ観客が店の前に溢れていて、改めてアマチュアなのに人気のあるバンドなんだなぁと思わされる。
女性ばかりのバンドだからか、男がやや多いようだ。

が…それにしても……

「なぁ和幸、なんか四角いフレームのめがねをかけてるヤツが妙に多くねぇか？」

ここにいる人間の3分の1は太めの四角フレームのめがねをかけているのだ。
しかも、めがねをかけた女は頭の高い位置で二つに髪をくくっているときた。
さらに、判で押したように赤いタータンチェックのスカートに、黒のジャケットなんかを合わせている。
クマのぬいぐるみを大量につけている女も、男までいる。

軽いカルチャーショックを感じるほどオレにとっては異様に見える光景も、和幸にはごく普通のことらしい。
和幸は呆れたように目を細め、ため息をついた。

「賢吾…オレの話全然覚えてないっしょ？
四角めがねとツインテールはＫＩＲＡのトレードマークなの！
ＫＩＲＡのファンが彼女の真似すんのは、当然だろ？だから、
オレも、ほら！」

と、和幸は自慢げに胸ポケットから黒い四角フレームの伊達めがねを取り出して見せた。

どうやら和幸のライバルは多いらしい。
成就させようと鼻息荒くしている恋が想像以上に険しい道だと知り、この夢見る幼馴染が少しだけ哀れに思えた。

4－2

開場時間になり、オレたちは入り口でパンフレットをもらってから会場に入った。
既に人の熱気でムンムンしている。
人の波にもまれて運ばれてきたのが、後方の左端。
ライトも当たりそうにない、隅っこだった。

「ちくしょーっ！！こんな端っこかよっ！！」

悔しそうに叫ぶ和幸を無視して、オレはパンフレットに目を落とした。
アマチュアだしきっと有名バンドのカバーだろうと思いきや、全曲オリジナルというのが売りらしい。
作詞はＫＩＲＡ、作曲はＡＧＥＨＡとＫＵＭＩが担当している。
結構本格的だな。

開演時間も近づき、観客達も時計を見ながらそわそわしている。
和幸など「まだかな～？」などと言いながら、爪先立ちになって舞台周辺をきょろきょろ見回している。
小さい頃からだが、全く落ち着きがない。

でもまぁ、何でも始まる直前と言うのが手持ち無沙汰でそわそわするものだ。
オレは退屈しのぎにと、再度ぐるりと会場を眺めた。

最後に何気なく舞台の方に目を向けると、中央最前列に見たことのある後姿を発見した。

「…田辺？」

気のせいかと思い、もう一度目を凝らして見てみる。
けれど前に立つ客が壁になって、はっきりと確認できない。
もしあれが田辺なら、高い確率で高梨がそばにいるはずだ。
って、何であいつら、こんなところにいるんだ！？

二人を探そうとイライラしながら首を動かしていると、突然会場内の電気が消え、真っ暗悩みに突き落とされた。

舞台の床にある小さなライトと非常口を示すライトだけが灯る。
客席は強烈な緑色に照らされているのに、舞台はぽっかり穴が開いたような闇。

出演者が舞台を歩くこつこつ音が聞こえたと同時に、囁き声のようなきれいなソプラノがゆったりと流れた。
まるでイタズラな天使が微笑んでいるような、甘い歌声。

夢見るように微笑むあなたに　私は恋に堕ちるの
２人の未来は永遠に　光のかなたへと繋がっていく
Ｉ　ｌｏｖｅ　…　Ｓｏ　ｌｏｖｅ'ｎ　ｙｏｕ，ｔｏｏ，
ｆｏｒｅｖｅｒ……

歌声が途切れ、一瞬の静寂の後。
大量の光と大量の音が一気に場内に湧き上がった。
うおーっ！と響く大歓声の中、アップテンポの曲が形作られていく。

眩しさに一瞬目が眩む。

慣れた目で振り上げられる拳の向こうにある舞台に視線を固定させた瞬間、驚愕に心臓が捻り上げられた。

真っ赤なギターを弾き鳴らし、四角フレームのめがねと同色のインカムをつけて歌うヴォーカル。
めがねから零れ落ちるんじゃないかと思うほど大きくて愛らしい瞳はライトできらきらと輝き、トレードマークのツインテールが彼女の心そのままに楽しそうに弾んでいる。

真っ白なシャツに赤いタータンチェックのネクタイ、ネクタイと同じ柄のプリーツのミニスカートには
二本の細くて黒い皮のベルトがまきついていて。
黒い3分丈のスパッツから伸びるほっそりした足の膝から下を覆うように、黒い厚底ブーツがライトの光をてらてらと反射させている。

おおよそオレの知っている彼女とは似ても似つかないけれど、間違うはずがない。

あれは、高梨きらら、本人だ。

驚いたなんてもんじゃない。
この大音量の中でもオレの心音が響いているんじゃないか？と思うほど、オレの心臓は大きな音を立てている。
日常の彼女を思い出し、なぜ彼女があれほどまでに陰に徹しているのかようやく理解できた。
ここにいる彼女本来の姿が最大の秘密だったんだ。

隣に立っていた和幸が、大きな声で話しかけてきた。
「賢吾！な？ＫＩＲＡってめちゃくちゃかわいーだろぉっ！？」
オレはなんて答えていいかわからずに、曖昧に頷いた。

かわいいなんてもんじゃ、ない。
彼女は一体どこまでオレを魅了すれば気が済むんだろう？
舞台の上で水を得た魚のように歌い踊る彼女は、まさしく太陽の光だった。
…あの光を独り占めしたい。
オレは恍惚と彼女を見つめ続けた。

この時、オレは再度恋に落ちたのだ。

ライブが終わってしばらくして、誕生日パーティ会場へと変貌を遂げた観客席へと案内された。
そこには３０人ほどの人間がひしめいていた。
その半数以上がバンド関係の人間らしく、個性的なスタイルでそれらしいオーラを放っている。

「まだＭＩＬＫ☆ＣＡＮＤＹのメンバーは出て来てないみたいだな～」

きょろきょろと忙しなく周辺を見回す和幸がイライラと呟いている。
あいつに会えたら何か楽しいことが待っているとでも思っているのだろうか？

ＫＩＲＡが高梨だとわかった瞬間から、ミーハー丸出しのコイツに素直にムカついていた。

悪いが、一生お前のモンにはなんねーよ。

悪魔なオレが心の中で呟いた。

…などと考えていると、見知った顔を発見。
田辺さんだ。

突然歩き出したオレに驚いた和幸を無視して、オレは彼女に声をかけた。

「こんなところで奇遇だな、田辺さん」

じっと彼女を見下ろしていると、一瞬だけ驚きで丸くなった目をゆったりと細めて笑った。

「あら、ほんと。意外なところで会ったわね、辰巳君」

冷静沈着。
すばやい状況判断と計算。

やっぱり彼女は食えないやつだ…改めてそう感じた。
敵に回したくはないな。

「なんだよ！賢吾の知り合い！？」

無視して女の子に声をかけたオレに腹を立てたらしく、和幸は拗ねて頬を膨らませて言った。
けれど、田辺さんの姿を見てその態度はころりと変わった。

きらきらした瞳が”紹介してくれ！”と懇願している。

「あぁ。田辺さん。同じ高校の同級生だ」
「よろしく…って、あなた、確かＫＡＺＵさんの従兄弟の和幸くん…違った？」
「え！？オレのこと知ってるの！？」
「知ってるも何も…いつもＫＩＲＡを穴が開くほど見つめてるから、結構有名よ？」
「ほんとっ！？オレって結構有名人だったんだ～！！」

和幸がきらきらした瞳でうれしそうに田辺さんを見つめていた。
…決して褒められているわけじゃないってこと、分かってんのか？
こいつ？

「それにしても、知らなかったわ。辰巳君がＭＩＬＫ☆ＣＡＮＤＹに興味があったなんて」

くすくす笑ってはいるけれど、瞳の奥にはずいぶん好戦的な光が宿っている。
敵対しても後々辛いのは自分だと分かっているので、穏便に進めたいところだな。

「和幸に誘われたんだ。初めて見たよ。
…初めてだったから、そりゃもう、驚いたぜ？」
「でしょうね。ギャップがすごいから
…まるで、夏毛から冬毛に抜け替わったオコジョみたいでしょ？」
「いや、ギャップについては多少は知っていたつもりなんだが
…これほど魅力的なオコジョを田辺さんが独占していたなんて、

な。
　さすが、ファン第一号」
「…ってことは、やっぱりオコジョの魅力に降参状態ってことかしら？
　近頃手懐けるのに余念がないように見えてたのは…気のせいじゃないのかな？」
「まぁ、見た通りで。オレ、完全に本気だけど？」
「…毛皮が目当てじゃ、ないでしょうね？まさか、販売目的とか？」
「まさか。んなわけねーだろ？
　…それに、オレが興味を引かれたのは、夏毛が先だぜ？
　全部ひっくるめて欲しいと断言できるよ」
「……そう」

田辺さんの肩の力がふっと抜け、くすくすと笑い始めた。
どうやら、敵にはならずに済んだようだ。

「え？え？何が？何のこと？教えてくれよぉ～！」

オレたちの間に流れる空気が読めない和幸は、仲間に入れないことを不服そうに訴えていた。

「ごめんなさいね？」と田辺さんが和幸に、学校で何人もの男を瞬殺した笑顔で微笑みかけた。
途端、でれりと笑み崩れた和幸。
満面の笑顔一つでアイツを黙らせた田辺さんに、心で拍手を捧げた。

「ね、辰巳君、もう一ついい？」
「なんだ？」
「あのね、オコジョはとっても繊細で、純情で気持ちが温かくて柔

らかいの。
泣かしたり怖がらせたりしないで…やさしく導いてあげてね？」
「了解」
にやりと笑ったオレに、田辺は満足そうに笑った。

5－1

「うはーっ！今日もサイコーだったっ！！」

ライブも無事終了。
たっぷりかいた汗をシャワーで流して、さっぱりモードでスポーツドリンクを飲みながら、もう一度ステージのことを考える。

まばゆいライトの中で私の相棒であるギターを夢中になって弾き鳴らし、天にでも舞い上がりそうな気分で力いっぱい歌ったあの時間。
うれしくて、楽しくて。
たくさんのプラスの刺激が私に降り注ぐ。

観客からの声援と熱気に煽られるまま、ライブハウス全体がひとつになって。
こんなにうれしい誕生日プレゼントはきっとないだろうなって思う。

もちろん、この楽屋に溢れている、ファンの人たちが心を込めてプレゼントしてくれた品々だってうれしいものなんだけどね。

今年もたくさんもらった花束。

自然の甘い香りがいっぱいに広がっている。
可愛いテディ・ベアは、私がよくライブでつけているぬいぐるみバッチと柄や洋服が違う子たち。
そうそう、手作りのアクセサリーもあった。
私のために一生懸命作ってくれたんだろうなって思うと、胸が熱くなる。

幸せだな、私。

まだまだ興奮冷めやらぬ体に、余計に幸せが埋め込まれていくみたいだ。

この後、お姉ちゃん達が帰って来てからパーティが始まる予定。
私が大好きなケーキを取りに行ってくれてるんだ〜。
お姉ちゃん達の中学校時代の同級生が、ケーキ通に人気のケーキ屋さんでパティシエをしているんだけど、毎年私のためにバースデーケーキを作ってくれる。
バンドをやり始めてからは、びっくりするようなパーティサイズで。
それがもう、すっごくおいしくて、かわいくて！
思い出しただけでよだれが出そうだ。

パーティには気心の知れた仲良しばかりが集まるから、楽しいし、すっごく盛り上がる。
ライブハウスやバンド関係者ばかりだから年上ばっかりだけど、みんなこぞってかわいがってくれる。

あ、そういえば、今日は和さんの従兄弟が友達連れて来るって言ってたっけ？
無意識に眉間に皺が寄る。

和さんに頼まれた時は私と同級生ということもあり、実はかなり躊躇した。
だって、私の正体を突き止めて、学校まで押しかけられたりしたら洒落にもならないもの。
せっかく苦労して隠し通してるのに。

最終的には和さんの「大丈夫！あいつ、ＫＩＲＡの大ファンだけど手が出せるほど甲斐性のあるやつじゃないから！」という一言で、オッケーすることにした。
聞けば高校もまったく別だし、なんといっても和さんが可愛がっている従兄弟だし、いざとなったら和さんが守ってくれるだろうし、問題ないかなって。

…それよりも問題は…あの変な男。
考えただけでも頭が痛くなる。

私が今最も警戒している男…”ＺＯＮＥ”というバンドのギターを担当している一輝（いつき）。
２１歳と聞いているけど、そんな風には見えないほどに軽いというか、非常識というか、何と言うか…。

彼は1年前ＺＯＮＥに途中参加した人で、初めて顔をあわせたときから何かというと肩を抱いてきたり腰に手を回してきたりと、体をぺたぺたと触ってくるのだ。
その手つきが気持ち悪いというか…とにかく嫌悪感しかなくて、私はできるだけ関わらないようにしている。

けど、ＺＯＮＥはこのＭＩＬＫ☆ＣＡＮＤＹが結成した当初からお世話になっているバンドで、しかもヴォーカルの疾風くんは赤ちゃんの頃からお隣同士で、現在お姉ちゃんと半同棲中だったりする。
だから、無碍には出来ないのよね…険悪になったら、疾風くんが困るだろうし。

私にとって彼は本当のお兄ちゃんみたいな存在で、だからついつい昔の名残で抱きついたりしてしまうほど大好きな人。
…今にして思えば、一輝の悪行は、その行動が問題だったという気がしないでもない。
それを見て、私は誰に触れられても平気な軽い女だって思ったのかも…。
それとも、うれしくなると抱きついてしまう習性のせい？
何で一輝が私になれなれしいのか、結局未だにわからない。

いっその事、疾風くんに抱きつくのは止めようかなぁ？何て考えたりもしたけど。
身長が１５８センチしかない私にとって、身長が１９０センチもある疾風くんに抱き上げてもらう時の快感は忘れられないものがある。
お姉ちゃんが何も言わずに笑ってるのをいいことに、高校生になった今もそうやって遊んでもらってるってのも何ですが…。

昔からの習慣だし、今更止めるっていってもなぁ～…。
止めたら疾風くんも寂しがって拗ねるからそのままでいいってお姉ちゃんは言うし…。
困ったな。

今日も一輝だけを呼ばないわけにはいかないってことで呼んだけど…正直会いたくない。
出来るだけ接点を少なくするように心掛けねば…。

ＺＯＮＥのメンバーは遅れてくることになってるし、今からぴりぴりしてても仕方ないんだけどね。

……。

…ほんっと、一輝って何で私をからかって遊んでるんだろ？
年齢を明かしていないとはいえ、外見から見てもすんごくお子ちゃまなのにね…悔しいけど。
普通に出かける時だって、いっつも中学生に間違われるし。
もっと年相応の女の子捜せばいいのに！
結構女の子に持てて、とっかえひっかえしてるって聞くのに、私なんかにかまうなっつーのっ！

「きらら。会場の準備できたから、おいで」

ぼんやりと考え事をしていたら、喜市伯父さんが楽屋に来た。
眉間に皺を寄せている私に「どうした？」なんて心配そうな顔で聞いてきたけど、私は慌ててなんでもないって笑って見せた。
まさか、一輝に会うのが嫌だなんていえない。

小走りで近づくと、伯父さんがぎゅっと抱きしめてくれた。

「きらら、誕生日おめでとう。
　つい昨日生まれたばかりだって思ってたのに、もう17歳か…早いな」

伯父さんは小さい頃からずっと私たち姉妹の第二のお父さんのような存在でいてくれた。
だからこそ、毎年一度こうして抱きしめてもらって成長を喜んでいることを体全体で伝えてくれることが、幸せでならないって思う。

「…ありがと」

小さい頃みたいに「大好き！」なんて恥ずかしくていえないけど、精一杯の気持ちを込めて感謝の言葉を返した。
今の私がいるのは、伯父さんのお陰でもあるから。

誕生日は、大切な人への感謝の日。
だからこんなに心が満たされるんだろうな。

5―2

型どおりの挨拶スピーチも適当に済ませると、みんな好き勝手に飲んだり食べたりし始めた。
その間、私は食べ物片手に来てくれた一人一人に挨拶して回った。
お祝いの言葉やプレゼント、それに熱烈なハグをもらい、じっくりと幸せをかみ締めている。

ＭＩＬＫ☆ＣＡＮＤＹのメンバーも巨大なケーキを手に戻って来ている。
今年も超うまそー、とよだれをたらさんばかりに見てると、「つまみ食いすんじゃないわよ、見苦しい」とお姉ちゃんに頭を叩かれた。
ふんっ、だ！

ＺＯＮＥのみんなが来てからケーキカットだ！と伯父さんが言ってた。
別腹が疼いてるから、どうしてもケーキに目がいってしまうのは仕方ないことだと思うんだけど。
私の年齢を知っている人たちは口をそろえて「相変わらずお子ちゃまですね～」なんて言ってからかってくる。

１７歳の誕生日なんですけどっ！
十分大人じゃんっ！！

ケーキカットの前に腰を落ち着けて話をしようと目論んでいたので、一番最後に桃ちゃんのところに挨拶に行くことにしていた。
一通り挨拶も終わったし、途中でもらった食べ物片手に進んでいくと、桃ちゃんが目立たない壁際で見知らぬ男の子二人と話をしているのが見えた。
…誰だろ？
頭を捻って考えて、ふと和さんの従兄弟と友達を招待したんだってことを思い出した。

そうか…私の正体を知らない人がこの会場に7人いるってことね…。

ここに来ているほとんどの人は、小学生の頃から伯父さんのライブハウスに顔を出していた私たち姉妹のことをよく知っている人たちだ。
けど、ここ2年以内にライブハウスに勤め始めた人やお馴染みバンドに新しく入った人たちには、私の年齢やＡＧＥＨＡの妹だなんていう私的なプロフィールを教えていない。

それは私がバンドを始める際に出した条件の一つ。
…なにせ、中学2年生でライブハウスに立つってことが、そもそも…だから。

新しいスタッフたちは年齢は知らないけれどＫＩＲＡは大人で、童顔だから子供っぽい振りをしている、ぐらいにしか思っていない。
なんせ前ヴォーカルの南さんの衣装がロリだったから、私よりもずっと幼く見えていたのだ。
その効果もあって、普通に化粧してるだけなのに案外とばれなかった。

お姉ちゃん達と同級生だと思っている人が多くて、しょっ中「どこの大学に行ってるの？」とか「お勤め？」なんて聞かれたりする。
中学卒業したらカミングアウトできるもんだと思っていたのに、高校があれだから…結局謎人間のままで過ごすことになってしまった。
お陰で一輝からのセクハラをうまく回避する手っ取り早い手段を放棄することになったけど…それ以外は特に困ることもないからいいんだけどね。
それに考えてみたら、高校生だと言ったところで、あのデリカシーなし男が遠慮するとは思えない。
かえって余計にお子ちゃま扱いしてくる可能性も高いし。

立派なレディをガキ扱いすんなっつーの！
むかつく！

桃ちゃんたちがいる場所は薄暗かったからすぐに気付かなかったけど、よくよく見てみると背の低い方の男の子にはなんとなく見覚えがあった。
私がメンバーになったときからずっと応援してくれている男の子だ。
どんなやつだろうと不安だっただけに、ちょっとだけ肩の力が抜けた。
これでも案外と人見知りなのだ。
秘密を抱えてからはなおさら。

…でも。
もう一人の、こっちに背中を向けている男の子。

なんだかどこかでみたような気がしないでもないんだけど…うまく思い出せない。
こんなところに来る知り合いなんてバンド関係者以外いないし、きっと気のせいだよね？

…なんて考えながら歩いていると、突然背中からがばり！と抱きつかれた。
と同時に耳にふっと生暖かい息がかかり、全身にざざざっ！と鳥肌が立った。

「なっ！！」

抗議の声を上げようとするとくすくすと笑い声が聞こえ、相手が予想通りの接触したくない男ナンバーワンだと知った。

「ＫＩＲＡ、誕生日おめでとう…」

低くて色気たっぷりの声で囁かれるも、正直、”気持ち悪い”以外に感じられない。
離れろ！と怒鳴りつけてやりたいけど、場を乱せない哀しき気遣い・日本人の性。
しかし、前回はどさくさにまぎれて胸を触られたので、両腕を胸の前でクロスさせてブロックすることは忘れなかった。
もう二度と揉ませやしない、乙女の乳！！

「……あ、ありがと、ござい…マス」

小さい声で答えると、さらに腕に力が入った。

だからっ！キモイっつーのっ！！！

イライラしながら引きつり笑顔で「ちょっと、放してくれません？」と言ってみても、「照れんなよ…」などと勘違いな言葉を返してきた。

なんなのよーっ！
このオレ大好き、オレ最高キャラはっ！！
ナルシストなんて大っ嫌いっ！！！

イライラはムカムカに変わり、私の限界が見えてきたその時。

突然正面から力強い腕に攫われ、それと同時に背中が涼しくなった。
少しでも一輝と距離を保ちたくて、背中をえびのように丸めて地面を見ていたから、一体誰が助けてくれたのかわからない。
けれど一輝みたいに嫌悪を感じないし、きっとかわいがってくれている誰かだろう。

「お前なんだよっ！」

一輝の怒鳴る声が聞こえたとき、私を抱きしめる見知らぬ人物はただ鼻でふん、と笑っただけだった。
…私の超・関係者で、一輝が知らない人なんていたっけ？
それにこの香り、この空気…なんか、妙に馴染んだ、身に覚えのあるものなんですけど？
おそるおそる顔を上げ、視線を上方に向けてみると、抱きしめていた相手とぱっちりと目が合った。

そして、驚愕。

「たっ…たったっ…たっ…」

壊れたおもちゃのように口をパクパクさせている私を見てブッと噴出した後、私にだけ聞こえる小さな声で彼は言った。

「こんなところで会うなんて奇遇だな、高梨きらら。
その壊れた口、閉じとけよ」

何でこんなとこに、辰巳が来てんのよっ！！！！

驚く私を他所に、男2人の無言の会話が始まった。

怒りで体を振るわせる一輝は、まるで人が殺せそうなぐらいの鋭い視線を辰巳に投げつけていた。

一方、私を抱きしめたままの辰巳はいつもの冷静な無表情のまま、一輝を見返していた。

熱い怒りと冷たい怒りの対決。

…こえぇぇぇぇっ！！！

間に挟まれた私はたまったもんじゃ、ない。

私は目だけで探し当てた桃ちゃんに、”助けて！”と視線で訴えた。
けど、桃ちゃんはにやりと笑ったまま、傍観者に徹していた。
あれは完全に面白がっている。
最後の希望に助ける意思がないことを知り、私はもう、ひたすら嵐が去るのを待つしかなかった。

一輝と辰巳じゃ、どっちにしてもトラブルの元凶にしかならないのは間違いない。
桃ちゃんの助けがないっていうなら…もう、全てが丸く収まるように、神にでも祈るしかない。

こういうのをなんていうんだっけ？
前門の虎、後門の狼？
虎口を逃れて竜穴に入る？

突然、一輝が沈黙を破った。

「…てめ、言葉わかんねーんじゃね？
お前はＫＩＲＡのなんだって聞いてんだよ。答えろ！」
「…初対面のアンタに答えなきゃいけないのか？」
「ったりめーだろ？オレからＫＩＲＡを奪ったんだ。
正当な理由がねーんなら、ぶっ飛ばすぜ？」
「正当な理由、ね…」

そういって、辰巳がうれしそうにくすくす笑った。
…びっくりだ。

いつもうっすら微笑んでいるだけなのに、これほど感情を露わにするなんて。
声出して笑ってんの、初めて見たよ。
私はうっかり、しつこいぐらいに辰巳の顔に見惚れてしまっていた。
と、それに気付いた目ざとい辰巳は、これまたうれしそうににっこりと笑い、空いていた右手で私の頬をさわさわとなでから顎を掴むと、ごく自然な動きで唇の横にキスをした。
…きっと傍から見たら、ばっちり唇を奪われているように見えたに違いない。

私の時間だけぱたり、と止まった。

「オレ、コイツと付き合ってるんだけど。
所謂、彼氏」

一瞬でその場の空気が凍りついた。

6―1

…面白い。

オレはこの、なんとも言えない奇妙な雰囲気をかもし出している空間をかなり楽しんでいた。

腕の中には驚愕のあまり落っことしてしまいそうなほど瞳を見開いたまま固まった、高梨きらら。
目の前には怒りと予期せぬ突然の衝撃のために思考回路が停止状態の高梨に、べたべたとまとわりついていた男。

この男、自称・高梨の男らしいのだが…かなり粘着質そうだ。
しかし、オレの敵ではない。
こういうガツガツした感じがあからさますぎて、高梨がどん引きしているのは間違いない。
そういう押し方が高梨には通じない、むしろマイナス評価にしかならないことに気付かないやつは、まず敵にもなれないだろう。

どっちにしろ、人間ウォッチングで培った観察力と理系頭をフル回転させて練る計画で、大概のトラブルはどうとでもなるのだから。
なによりもこれほどまでに感情を垂れ流している男は分かりやすく、料理しやすいのが定説だ。

…まぁ、油断大敵と言えなくはないが。

「いっ、いっ…いつの間にーーっ！？あんた…っ、もが…っ！」

突然叫び始めた高梨の口を素早く右手でふさいだ。
ついに我に返ったらしい。

『いつの間にあんた、私の彼になったのよっ！？』…みたいなことをいいたかったに違いない。
しかし、こんなところで暴露されても、百害あって一利なしだ。

コイツ、人の計画を台無しにする気か？
って、高梨の気持ちも確認せず、計画も何もあったもんじゃないんだけどな。

……
……
……まぁ、いいか。

高梨の気持ちはあとからでもついてくるだろう。

「今日誕生日ライブだってことぐらい、ちゃんと分かってるよ、K

ＩＲＡ。
紹介するのが恥ずかしいって理由だけじゃ、大人しく待ってられないって。
オレだってこんな大事な日ぐらい顔を出さないワケにはいかないだろ……彼氏として。
そうだろ？」

抱きしめる腕にぎゅっと力を入れ、息を吹きかけるように耳元で囁くと、高梨の体はびくり！と震えてからかちんこちんに固まった。

これは不本意だが、両親がよくやっている行為を真似させてもらった。
耳元で、囁くように語り掛けるコミュニケーション術。
なるほど。
万年バカップル夫婦の技は、技をかけられた側にも見せ付けられた側にもかなり効き目があるらしい。

両親が少し、大きく見えた。

目の前で呆然としている一輝という男に挑戦的に笑いかけてみれば、意識が現実に戻ってきたようで、一瞬にしてその瞳に怒りの炎を燃やした。

「このクソ野郎！！」

高梨を抱きしめたままのオレを殴ろうと男の体が動いたその時。

「一輝。何してるんだ、止めろ」

初めて聞く、深くて響くような声。
大人の色気を漂わせた、同性でも聞き惚れてしまうバリトンボイス。
口調は穏やかなのに、人を従わせる圧倒的な気が備わっているあたり、油断ならない。

誰だ？

「疾風くんっ！！！」

突然身を捩った高梨がオレの腕をすり抜け、突然現れた男に何のためらいもなく抱きついた。
それがさも当然のように、疾風と呼ばれた男は高梨を顔の高さまで抱き上げてからぎゅっと抱きしめた。

まるで、再会を喜ぶ恋人同士みたいではないか。

男の顔にしがみつく高梨の微笑みは、これまで見たことがないほど無邪気で、男に全信頼を寄せていることがすぐに分かった。

胸がムカムカした。

いまだかつて感じたことのない、ありえないほどの、嫉妬。敗北感。

オレの中にこんな気持ちがあったこと自体驚きだが。

コイツはただの敵じゃない。
半端な対決では、きっともっていかれてしまうだろう。

彼女とは一体どういう関係なんだろう？
もしかして、コイツが高梨の本命…？

だとしたら、分が悪すぎる。

オレは奥歯をぎりりとかみ締めた。

「ＫＩＲＡ、誕生日おめでとう」
「へへへへ～。ありがと、疾風君っ」

語尾にハートマークでも付いてそうなぐらいうれしそうに礼を言い、疾風とやらのおでこに自分のおでこをこつんとぶつける高梨。
イライラ度は天井知らずに上昇していく。
幸せそうにおでこを合わせたまま再度微笑みあう二人に、我慢も限界を越えた。

オレは怒りに任せてべりり、と高梨を疾風から引き剥がし、背中から抱きかかえ、ぎゅっと抱きしめた。
俺に抱っこされたままの高梨は、事態についていけなくてぽーぜん

としているため、まるでぬいぐるみのように大人しい。
彼女が正気に戻らないうちにはっきりと立場を主張すべく、疾風を睨みつけた。

「……へぇ」

余裕綽々の笑みを浮かべながら、疾風は右手で顎をさすりさすりオレを観察し始めた。
男のオレから見てもカッコいいところが、はっきりムカつく。

「名前は？」
「辰巳賢吾」
「辰巳…？」
「そうだ」

突然驚いて正気に戻り、声を上げようとした高梨。
オレはもちろん片手で口をふさいだ。

「もがっもがっ！！んがーっ！！！」

なんとも緊張感のない音声だ。

すると突然疾風が、がははははっ！と笑い始めた。
さすがのオレもぎょっとしてしまい、その隙に高梨に押さえた手を払われた。

手を払ったことに満足したのか、高梨は身体の拘束を外そうとはしなかった。
もしかしたら、この状況を忘れているとか…？
どこまでもとぼけたヤツだと呆れる反面、好都合だった。

「疾風君っ、何で笑ってんのよっ！」
「いやぁ～…ＫＩＲＡにもようやく春が来たんだなぁと思ってさぁ～」
「疾風君っ！だからぁっ！！…もがっ！！！」

今度は疾風が大きな手で高梨の口を塞いだ。

「…面白い。
おい、一輝、オレはコイツと話があるから、お前あっちに行ってろ」
「でもっ！疾風さんっ！！」
「…行けっつってんだろ？」
「……っ！わかりましたよっ…」

一輝は不貞腐れた顔のまま、舞台の方へと歩いていった。
邪魔者が去ってせいせいした。

去っていく背中をふん、と鼻を鳴らして睨みつけると、シャツの背中に何かがぶら下がった。

「賢吾っ！！これ、どういうことだよっ！！説明しろよっ！！！
何で、何でお前がっ！ＫＩＲＡの彼氏なんだよっ！！」

振り向いた先には、マジ泣きして顔がぐちゃぐちゃになっている和幸がいた。

…ウザイ。
オレはため息をひとつ吐いて、片手でしっしっと追い払った。

和幸は「ひでぇっ！！」と叫んで、部屋の隅まで歩いていったかと思うと、体育座りをしてえぐえぐと泣き始めた。
若干罪悪感がないではないが、高梨が絡むことならば情けなど無用だ。

これでしばらくは一人の世界に入っていることだろうし、落ち着いた頃フォローでも入れることにしよう。

全く手のかかる男だ。

6－2

「桃ちゃん、こっち来てくれる？」

疾風が田辺に声をかけた。
田辺と親しそうな様子からみると、この3人の付き合いはかなり長いようだ。

「お久しぶりです。疾風さん」

にっこりと笑う田辺に疾風もにかっと笑い返した。

「彼は、例の学校の…？」
「えぇ、そうです。その通りです」

意味深に視線を交わす2人に、思わず眉間に皺が寄る。
しかし俺の反応とは違い、疾風の表情は明るい。
…なんだ？

不信感丸出しの俺に、疾風は体格と同じようにがっちりした右手を差し出した。

「んじゃ、改めて。

初めまして、辰巳君…って、賢吾でいいか。
どうせ長い付き合いになるんだろうし」
「…はぁ」
「オレは疾風。ＺＯＮＥってバンドのヴォーカルやってんだ。
こいつらとは幼馴染で兄貴みたいなもんだ。
よろしくな！」
「こちらこそ、よろしくお願いします…疾風さん」

結構な握力で握られるが、こちらも負けてはいない。
まっすぐ眼を見たまま、同じような力加減で握り返した。
ある種けん制だ。

しかし、なんだか分からないまま和平条約が成立しているようだ。
田辺との間で一体どんなやりとりがあったのだろうか？

ちらりと彼女の方を向いても、意味深ににっこりと微笑むばかり。

「ちなみにね、疾風さんは、ＭＩＬＫ☆ＣＡＮＤＹのドラムできらら
の
お姉さんでもあるあげはさんの彼なのよ？
…ということで、禍根を残すような誤解は止めてね？
きららが泣いちゃうと困るから」

ぱちっと様になるウィンクした田辺さん。
和幸が正気だったら即ノック・アウトだっただろうが…今ヤツは周
りが見えないほど号泣中だ。

そして、この地点で俺の中で彼は”疾風”から”疾風さん”に昇格

した。
彼も大切なキーパーソンだ。

とそこに、突然乱入してきた、ちょっとケバイ系のお姉さん。

「あらあら？きららちゃぁ～ん。どうしちゃったのぉ？
疾風以外の男に抱っこされちゃってぇ～」

高梨を覗き込んだ彼女は、右手を口元に沿え、目をバナナのように細めてムフフ…と意味深に笑った。
途端、高梨が腕の中でもがき始めた。

「ぎゃっ！！あっ、あげはちゃんっ！
ちょっ…とっ、あんた、いい加減放しなさいよっ、馬鹿っ！！」

えらい言われように、少々ムッとする。
オレを捕まえて馬鹿だと？

…放してやるもんか。
両手を使ってさらに強く拘束すると、暴れ疲れたのか、抵抗をやめた高梨はがっくりと首を垂れた。

ケラケラと豪快に笑い始めた高梨の姉、あげはさんは、サラサラの腰まで届くロングヘアをかき上げながら、今度は俺に意味深な視線を送ってくる。

「初めましてぇ～。あんたでしょ？辰巳君って！
アタシ、きららの姉のあげは。末永くよろしくぅ～」
「こちらこそ、よろしくお願いします」
馬鹿丁寧に返せば、ひらひらと手を振るあげはさん。
けれどすぐに疾風さんの腕に攫われ、当たり前のように唇を合わせた。
ごく普通の、免疫のない人間ならばここで怯むだろうが、何せ俺はあの両親の子。
正直、世間様を無視してべたべたくっつきあうのが家の両親だけじゃないことに安堵した。

それにしても。
彼女もまた俺という存在をすっかり承知している様子。
悪印象はないようだが…一体どんな会話がこのメンバーの間でなされているのだろうか？
改めて”お目付け役”田辺さんの、高梨を守る会（？）の重要性を再認識する。
とりあえず、俺は彼らのお眼がねにかなっているようなので、よしとしよう。
深く考えるよりも、知り合うことから始めなければ。
外堀を埋めることは、戦略上、有効な手段であることには違いないのだから。
…と、一人納得していると、この中で全く納得できていない当事者

の一人が反抗を開始した。

「ちょっとぉ～！なんでお姉ちゃんも疾風君も辰巳のこと知ってんのよっ！！

桃ちゃんっ、お姉ちゃん達に一体何を吹き込んだのよっ！！」

「きららったら…吹き込んだなんて、心外ね？

私は心配性のお兄様、お姉様に、きららの高校生活における最重要事項について報告していただけよ？」

「…って！辰巳のことなんて話す必要ないじゃんっ！！」

「そうかしら？」

「そうだよっ！！

辰巳なんてねーっ、辰巳なんて、辰巳ってだけでそれ以上でもそれ以下でもないのっ！！

私の日陰者生活にちょっかいかけてくるしさっ！

お陰で毎日ドキドキしっぱなしなんだからっ！！

ヤツはねぇ、私にとって祟り神様なのっ！！祟られてるのっ、私はっ！！」

「きらら、あなた最近、ジブリ作品にはまり過ぎじゃない？」

…こいつ、意味分からん。

真剣に怒ってるらしいが、どうも独特の回路で独自の発想を生み出しているようだ。

きっとここにいる全員そう思っているのだろう。

かといって、発言の奇怪さを指摘すれば烈火のごとく怒るタイプのようだし。

疾風さんもあげはさんも奥歯をかみ締め、肩を震わせながら笑いをこらえている。

いつもと同じ調子で話を続けている田辺はすごいヤツだ。

みんな高梨のこういうところがかわいくてたまらないのだろう。
俺だってこいつを知れば知るほど、この意外性にやられっぱなしなのだから。

現に今だって、勝手に緩んだ頬が自然と笑顔を作ってしまっているぐらいだ。
オレの鋼のポーカーフェイスはどこにいったんだろう？
高梨がかわいくてたまらない。

とにかく。

高梨の意味不明な台詞からすると、高梨が俺がテリトリーに入ることを許し、いい感じに意識してくれているのは間違いなさそうだ。
嫌だ嫌だと言いつつも、オレの腕から抜け出そうとしないどころか、全体重を俺の両腕に預けてきている始末だし。
本当に無防備なヤツだ。

無意識なだけに手ごたえは十二分に感じるし、なによりこれでは危なっかしくて俺が手放せない。

「…っと。
このままぬいぐるみ・きららちゃんを眺めていたいとこだけどぉ～。

主役、呼ばれてるよぉ？」

ごめんね？と高梨の腕を引っ張ったあげはさんは、田辺さんを伴ってきららを舞台の方へ連れて行ってしまった。
俺は無意識に自分の両手を眺め、「…残念」と呟いていた。

それを聞いた疾風さんが、ぷっと吹き出した。
ムッと軽く睨みつけると、「ごめんごめん！」と言いつつ、また笑い始めた。

この俺があの両親のようなことを平気でしてしまうなんて…予想よりも軽いが、ショックなことには変わりなかった。
でもあの心地よさ、陶酔感を知ってしまうと、もう止められないだろう、絶対に。

疾風さんはぼんやりと考え込むオレの肩をバンバンと叩いた。

「ま、そんなにがっかりすんなって！きららが消えるわけじゃねーんだし」
「それは、そうですが」

喫煙者がタバコがないと口寂しいというのと似たような心境です、きっと…なんて言うのは、不謹慎だろうか？

「…それにしても、あのお子ちゃまがねぇ～」

腕を組んでしみじみと呟く疾風さんは、まるで娘を見守る父親のよ

うだ。
高梨のことを心から大切にしていることがよくわかる。
なのに…？
「俺の事、なんでそんなにすんなり受け入れられるんですか？
それほど親しくもない、あなたたちにしてみたらそれこそ
”どこの馬の骨か分からない男”でしょう？」
ずっと疑問に思っていたことを口に出してみる。
「ん？…あぁ。
ま、正直なとこ、今のところは大半が桃ちゃんに対する信頼だな。
彼女の人を見る目は天下一品。
大ボケ天然娘が無事に生きてこられたのも彼女のお陰だしな」
「…なるほど」
「とはいえ、キミに対する評価が低いってワケじゃねーぜ？
こういう世界に生きてる分だけ、人を見る目はシビアなつもりだし？
俺なりに納得して、きららをキミに預けてんだから」
「それは、ありがとうございます」
「けどな」
突然、穏やかだった疾風さんをまとう空気が厳しくなった。
視線で人を殺せそうな眼光が俺を刺し貫く。
「絶対にきららを裏切るなよ？
納得できねー泣かせ方したら、承知しねーぞ？

あいつは、俺たちの大切な妹だ。
くっだらねーことしたら、マジ抹殺するよ？…わかってんな？」

中途半端な気持ちで高梨に近づいてた男なら、きっとびびって逃げるだろうな。
…まぁ、中途半端だと判断されていたら、これだけ強引に近づこうとアプローチしていた時にボコボコにされてただろうけどね。

ということは、この状況にまでこぎつけた俺は、かなりいいポジションをキープできたと言っても過言ではないのではないだろうか？
もとより泣かすつもりも裏切るつもりも手放すつもりもないんだから。
…ただ、高梨の全てをオレのものにしたいってだけで。

いい風向きだ。

「…高梨に対して”くっだらねーこと”は、俺がさせませんよ？
どんなヤツにも、ね」

俺は疾風さんの目を真直ぐに見て、にやりと笑った。
俺の答えに満足したのか、疾風さんは「食えねぇヤツ」と笑って、俺の肩に腕を回した。

どうやら、地盤は固まった。
あとは高梨相手に楽しい時間を満喫するのみ。

まずは、明日のデートを楽しみにしようか？

7―1

あちぃ……

5月も終わりになれば、やっぱり日差しは夏っぽい。
日焼け止めクリームしっかり塗りこんできでよかった。

日向では汗がだらだらと流れてくるけど、こうして日陰でお茶飲んでる分には心地よい初夏を満喫できる。
風も爽やかで心地いいし、街路樹は青々と輝いているし、空は真っ青で、雲は真っ白。
春真っ盛りとは違って、少し緑がちなこの季節って清々しくて好きだな。

誕生日が5月ってことも理由の一つだけど、一年を通してやっぱり初夏が一番好き。
花粉症じゃなくて、本当によかった。

今さっき運ばれてきたアイスミントティの氷が融けて、からん、と涼しげな音を立てる。
テーブルを覆っているパラソルから漏れる光が、グラスをきらきら

輝かせてくれてる。
まるで小さな宝石が添えられてるみたい。
光の効果で、飾られたペパーミントの瑞々しい葉がより色鮮やかに見える。

休日。
最高にいいお天気。
おしゃれなカフェでのんびりしたティータイム。
慌しい日常でささくれた心が、それだけで癒されていく。

…これが、あいつとの待ち合わせでなければ。

そう。
私はライブ明けの貴重な休みであるはずの土曜日に、一方的に押し付けられた約束を果たすためにだけに、学校の最寄駅前にあるカフェのテラスでお茶を飲んでいたりする。

こんな約束、無視するつもりだったのよ！
疲れてるし、宿題やんなきゃいけないし！
何より、アイツに頭きてるしっ！！

昨日のあれ、何？

なんてことしてくれたんだ、賢吾めっ！！
思い出しただけでも腹が立つ。

昨日は私の誕生日パーティのはずだったのよ。
なのに、あちこちでお声がかかる度に何故か隣にはあいつがいて、
気付いたら腰やら肩やらに腕まわしてたりして。
それを見た小さい頃からの顔馴染みたちは「ＫＩＲＡの男だー！」
「ようやくＫＩＲＡが大人になったー！」「赤飯だー！」とわけの
分からない盛り上がりを見せた。

まるで婚約発表記念パーティだといったのは、確か桃ちゃん……。
そんな台詞に満足げに笑ったのは、賢吾の野郎。

お開きの頃には賢吾と私は、公認の”べたべた甘甘カップル”だと
いうことになっていた。

…何ゆえ？

一輝が一切近づいてこなかったってのは、ありがたかったんだけど
さ…。

最悪の記憶のせいでイライラした気持ちを落ち着けようと、ずずず

っとミントティを吸い込んだ。
すっと冷たげなミントの香りが鼻をくすぐり、ひんやりした喉越しが気持ちいい。

とても美味。
ちょっと爽快。

……
それにしても…

時間はもうすぐ1時４５分。
なんだか今日は、時間が過ぎるのがやけに遅いような気がする。

大体。
何で賢吾、早く来ないの？

待ち合わせの時間は2時だし、遅刻ってワケじゃないんだけど。
何故か落ち着かない気分の私は、そわそわして時計ばかり見てる。
って、待ち合わせ時間３０分以上前から来る私もどうかしてるんだけどさ。

なんだか家にいても落ち着かなくて、朝も早く目が覚めちゃって、
やることなくはないけど手につかなくて。
結局家を飛び出してきてしまったのだ。

う〜ん。
もう少し何かやることなかったのか、私は？
いつもなら本の一冊もって歩いてるのに、今日はすっこり忘れてきてしまった。
いい詩が思いついた時のために持ち歩いているミニノートとシャーペンはあるんだけど、今日は何故か
開く気にもならない。
集中力がなくていいフレーズが思いつかないし、見直しても考えをまとめることが出来そうにない。
私らしくないけど。

…そういえば、服…これでよかったのかなぁ？
やっぱり、スカートの方が良かった？
いきなり不安になった。

朝起きて、クローゼットひっくり返してあれこれ組み合わせてみたけど、どれもしっくりこなくて。
ＫＩＲＡっぽいのは除外だし、かといって学校での根暗キャラっぽいのはなんかヤだし。
甘すぎるとこっぱずかしいからちょっとボーイッシュなヤツにと思ったけど、それじゃあんまりにも女の子らしくないし。
で、結局この前疾風くんにおねだりして買ってもらったチェックの三段フリルのショートパンツに、ビーズデコがかわいいぴったりしたタンクトップ、それに薄手の長袖パーカーを合わせてきたんだど。
アイツ、どういう格好で来るんだろ？

私子供っぽさ丸出しかも？
もうちょっと背伸びするべきだった？
でも大人っぽい格好、似合わないしなぁ～…まるっきりコスプレみたいになっちゃうし。

コスプレみたいな舞台衣装はしっくり来るのに、大人びた格好が普通にコスプレになるってのは一体どういうことなんだ？と何度か自問自答を繰り返してきたけど、そう見えるもんは仕方ないわけで。

……
……って。

何で私、んなこと気にしてんの！？
ばっかじゃないのっ！！
たかだか賢吾に会うってだけでだけでっ！！
あんなやつ、ふんっ！！！ってなもんだ！

…と一人で憤慨していたら。
突然背中から抱きしめられた。

「きらら…予想外に早く着いたんだな」

顔の見えない相手に抱きしめられたりしたら、「ぎゃっ！！」と悲鳴の一つも上げるとこだけど。
何故かこの腕が賢吾のものだと一瞬で分かってしまったから、何故か声を上げる気すら起こらないわけで。
何故かいつの間にやら、こんな体質オプションされてたってわけだ。

なんかさ、賢吾の匂いや気配って安心できるって感じなんだよね～。
うっかりするとずっと身を任せてしまいたくなるような、ふんふん匂っていたくなるような。

疾風君もそうだけど、何故か無条件に受け入れられるというか。
私、結構人見知りなんだけどなぁ。
”お兄ちゃん”って感じじゃないんだけど…う～ん、何ていうんだろう、こういうの？

とにかく、摩訶不思議な存在だ。

さっきまでのぷりぷりした小さな怒りがすっと消え、肩の力が抜けたせいか自然にえへら、と笑ってしまいそうになる。
あまりにもリラックスできるものだから、無意識に背後にある大きな胸に頭をもたれさせてるし。

「お茶、飲みたかったから、早く来ただけ！」

そういう感覚がなんだか恥ずかしくなって、つんとすましてみせる。
すると、右頬に優しく触れる、温かくも柔らかな感触。

ちゅっと音をさせて離れていったと思ったら、抱きしめられた腕にぎゅっと力が入った。

「…悪い。待たせたな」

途端にばばばっと顔が赤くなった。

……

……

……って、ちょっと待てっ！

なんでなんでなんで！？

賢吾は私の天敵じゃんっ！！

「ちょっ……ちっ、ちっがぁ～～う！！！

なんか違う！！」

私は両手を振り回して、賢吾の腕を振り解いて振り向いた。

かなりムッとした顔をした顔にややひるんだが、ここははっきり言ってやろうと賢吾の鼻に人差し指をぶにゅっと押し付けた。

無抵抗だけど、かなり不本意そうだ。

「なにするんだ？」
「それはこっちの台詞」
「なぜ？」
「なんでこんなとこでほっぺにちゅ、するかな？」
「…不満はそれだけ？」
「他になんかある？」
「いや……」

何か言いたげなにやけた顔を隠そうと、片手で口元を覆った賢吾。
昨夜で慣れたつもりだけど、こうまで表情豊かな賢吾って…なんだかなぁ…。

「んで？この行動の理由は？」
「そりゃ、二人の関係を鑑みれば、妥当な線だろう？」

にやりと笑った喰えない笑みに、顔が引きつった。

…なんじゃそりゃ？

鼻が押しつぶされても様になる笑みを見せた賢吾…純粋に悔しい。
やられっぱなしじゃん、私。

気持ちがすっかり萎え、押し付けた指をのろのろと下ろした。

7―2

機嫌よさそうな賢吾は迷わず私の隣の椅子に座り、ホットコーヒーを注文した。
この暑さでホットって…変なヤツだ。

すっかりくつろいだ様子で座る賢吾と自分との間にある感情の差になんだか納得がいかなくて、力抜け気味の頭をテーブルに肘をついた両手で支え、賢吾を横目で睨んだ。

「…けんっ…辰、巳、あのねぇ…」
「苗字じゃなくて、名前呼べって言っただろう？オレの名前は？」
「…賢吾」
「そうそう。で？」

…ほら、もうすっかりヤツのペースだ。
いいけどさ。

「アンタのお陰で私たち、すっかり付き合ってることになっちゃったじゃん。
誕生日おめでとうメールに混じって冷やかしメールが続々と届くし
…どうしてくれんの？」
「どうもこうも、事実じゃないか」
「は？」

「昨日もそう言っただろう？オレのモノだって」
「…私の意見は？」
「これまでのお前を観察してれば、自ずと答えが見える。
きらら、心身の全てでもってオレを受け入れてくれてるじゃないか」

言わなくても分かると真顔で自信たっぷりに言い放ったこの男…何者だ！？
ただの勘違い男じゃんっ！
誰も好きだなんていってないしっ！

「勝手に決め付けないでよっ！
私じゃないのに何で私の気持ちが分かるってのよ？」
「それはもう、観察力と明晰な頭脳を使えば、雑作もないことだ」
「そういうのを、妄想って言うのよ！」
「でもさ、オレが抱きしめても手を肩に回しても
何の抵抗も感じないんだろ？」
「え？…まぁ、そりゃ…特には…」
「それに、キスだって人前が嫌ってだけなんだろ？」
「当たり前じゃんっ！
人前でなんて、普通の感覚持ってたらトーゼン！恥ずかしいじゃないっ！
大体、見せるもんじゃないでしょ、普通っ！」
「それって、オレを受け入れてくれてるってことじゃないのか？」
「…それ、どういう理屈？」

私はどどっと疲れ、脱力。

それを見て、にやりと笑う賢吾。
喰えないやつというよりは、喰いたくないやつだ。

それはさておき。

私は賢吾を受け入れているのだろうか？という問い。

確かに、受け入れてるわよ。
初めて会った時のような気まずさや恐怖心は全くないし、何かあった時真っ先に私のこと助けに来てくれるって心の底から信じてるもの。

賢吾はかなりいいヤツだし、冷たくて感情なさそうに見えて人一倍気遣いの出来る、とっても優しい人間だってこともわかってる。
一緒にいても全然嫌じゃないし、楽しいし、むしろ些細な口げんかすら楽しんでいる自分もいるわけで。

ただ…これって、恋なの？

正直、そこんとこがよくわかならい。
恋って、どんな感情なんだろう？

たくさん愛や恋の歌を歌ってきたのに、恋愛なんて全然したことがないんだもん。

初恋の人は、もちろん、疾風君。
でも、意識する以前から疾風君はお姉ちゃんのモノで、それが当然だから特に腹を立てたり嫉妬したりすることもなかったし、私だけを見て！なんてことも全く思わなかった。
お姉ちゃんがいて疾風君がいて、私がいる。
それが一番居心地のいい関係だったから。

つまり、初恋と言いつつも所謂”男女の付き合い”なんてもの、端から想定していた相手ではなかった。
ただ”大好き！”って思ってた。

それって、憧れってヤツかな？
恋に恋してたから、疾風君はうってつけの相手だったってことだろうか？

小学生の頃はしつこいくらいに「はやてくん、だいすきっ！！」って、うれしそうに本人に伝え続けていた。
それから「俺もきららが好きだよ～」って抱きしめ返してもらって、お姉ちゃんは隣でニコニコ笑いながら「私もきららが大好きよ～！」
…それで大満足。

みんなが恋愛に浮かれ始める中学生の時。
恋バナに花を咲かせるクラスメートを尻目に、私は一人バンドに走っていた。

中学生では早すぎる、大人びた世界に身を投げ入れていたので、目立ちたくない私は地味キャラを装うようになり、いつの間にか同性からも異性からも影のような存在として扱われるようになった。

結果的に、恋愛からも同級生との交友からも遠くはなれたところで生きることになった。

それでも十分満足だった我が人生。
桃ちゃんもいるし、家族もいるし、バンド仲間もいるし…寂しいなんて思った事もなかった。

結果。
私の恋愛スキルに関しては、全くもってお粗末な状況となってしまったワケで。

疾風君も賢吾みたいに私をぎゅっと抱きしめてくれるし、頭を撫でてくれたりするし、手を繋いだり腕を組んだりしてくれる。
幼い頃からの習慣の延長で、お礼とかお休みの挨拶でほっぺにちゅってしてくれるし。

もちろん、こんなこと、誰にでも許してるわけじゃない。
お父さんや伯父さん以外には疾風君と賢吾だけ。
ぬいぐるみや小動物を可愛がるみたいに頭を撫でられるだけならまだしも、それ以外の目的で他人に体を触れられるなんて気持ち悪いったらない。

例えば、一輝みたいなやつ。
もう、コイツだけは我慢ならない。

ライブ終了後なんて、出待ちしてる複数の女の子の身体をぶしつけに撫で回して、その手で私を捕まえようとする。
自分が同じ事されてるんだと思ったら、ぞっとする。

一輝の精神構造って、ホント、わかんない。
きっと女の子の、大切な人にしか入ってもらいたくない柔らかな心の領域を守る扉すらこじ開けて、怯えた反応も都合よく無視して平気で無遠慮に撫で回すんだ。
そういうのって、絶対に許せない。

…って、話それたけどさ。

とにかく、私の賢吾への信頼度はかなり高いというか、何故か自然に彼を受け入れてしまうのだ。
嫌じゃないんだもん。

ってことは、賢吾は私の中では”家族”に近い存在としてインプットされているのかもしれない。

けど。
疾風君がするのと賢吾のする事は、同じようでどこか違う。

疾風君にほっぺにチュ、されているのを誰かに見られて、”恥ずかしい”とかそんな気持ちになった事は一度もないけど、でも同じことを賢吾にされたら恥ずかしいような、逃げ出して隠れてしまいたい気持ちになる。

なんだろ？

賢吾に抱きしめられると心臓がどきどきして、きゅうって痛くなるっていうか…何か、どこか切ない感じがする。

それって…どうよ？

「……」

…頭、割れそう……。

大混乱による頭痛が襲ってきた時、とっくの昔にはこぼれて来ていたコーヒーをゆったりと飲んでいた賢吾が優しく頭をぽんぽんと叩いた。

「…とりあえず、考え込むのはここまで。

昨日の今日で疲れただろうから委員会の資料は適当に仕上げといたし、

今日は気分転換に海眺めに行くぞ」

向けられた視線の柔らかさに、心臓がどくんと跳ねた。
なんでだろう？
「お前、悩むと知恵熱出して倒れそうだし」なんて、私をお子ちゃま扱いして嫌みったらしく笑ってる男相手に。
頬がどんどん熱くなってくる……っ！
頭の中に散らばった思考が真っ白になってしまった私は、ただただぼんやりと賢吾の顔を眺めているしかなかった。
苦笑を浮かべて、そつのないスマートな仕草で立ち上がった賢吾は私の腕をそっと取り、出口へと私を誘った。

それから、賢吾は予告通り、ベイエリアにあるおしゃれなショッピングスポットに連れていってくれた。
出てきた時間が遅かったからあまり一緒にいられなかったけど、でも夕食を食べて別れるわずか数時間がとても楽しくて、幸せで、面白くて、きらきらした時間の塊になっていた。
賢吾と一緒の時間は、全然自分を飾らない時間。
大きな口を開けてハンバーガーを食べたって、大好きなぬいぐるみ

を見つけてキャーキャー騒いだって、キラキラ光を反射させる海に大げさに感動したことをそのまま伝えたって、全然平気。
賢吾はどんな私にも優しい瞳を向けて受け入れてくれるってこと、知ってるから。

ありのままの自分でいられることが、ありのままの私を受け止めてくれることがとても心地よくて、うれしくて。
そしてそれ以上に賢吾もまた私と同じように、本来の飾らない彼自身を見せてくれることがうれしかった。

他人と比べれば無表情な彼だけど、それでもたくさんの感情を表現してるってことはもう随分前から分かってた。
過剰なコミュニケーションには恥ずかしさを感じるけれど、その体温からだってたくさんの気持ちを汲むことが出来る。

『それって、オレを受け入れてくれてるってことじゃないのか？』

ふと、賢吾の言葉が頭の中に蘇ってきた。
受け入れていることは、間違いない。
一緒にいることが楽しくて楽しくて仕方ない。
でもそれって、桃ちゃん、お姉ちゃん、疾風君、伯父さんやお父さん、お母さんにも言える事だし。
賢吾に対する気持ちが、そんな大切な人たちに感じているのと同じ気持ちが少しずつ混じっているのは
間違いない。

それが賢吾が意味する”受け入れ”になるのかどうか…やっぱりわからない。

恋の基準って、一体何？
どんな状態になったら、恋って言えるの？

恋愛小説にはたくさんの恋愛があって、でも大概はヒーローとヒロインは愛し合い、お互いを慈しみ合い、時には嫉妬し、不安になり、ケンかなんかしたら苦しくなったり…。
あ、その前に出会いがあって、友情があって、お互いの気持ちが特別になって、相手を想う気持ちが友達以上になって、思い悩んで、それでも失いたくなくて、告白して、お互いに気持ちを受け入れて…そういえば、出会った瞬間に何かびびっとくるものがあったりもするんじゃないだろうか？

そういうの、私たち2人の間にはないような気がする。
全部突然で、全部流されるままで、気付いたらこうなってた、みたいな。

……
……
…やっぱり、わかんないや。

んじゃやっぱり、これって恋じゃないのかなぁ？

8－1

ふわぁ…と大口開けて大あくび。
思いっきり両手を挙げて、うーんと伸びをした。
時計を見れば、既に時間は9時。
いつもの休日より2時間も長く眠っていたことになる。
さすがに二日連続人込みに遊びに行けば、疲れる。

正直、人の多いところはあまり好きになれない。
6月が近づいてきているせいか空気が湿気を大量に帯びているのも、余計にいただけない。
そんな気候であるにもかかわらず、群れるような人から発せられた熱気とたばこの匂い、食べ物の…特に揚げ物の匂いが混ざり合っている空間ってのは、気分も萎えてくるし精神的ダメージもでかい。
きららがいなければ、絶対に行かないだろう。

昨日のデートを思い返しただけで、思わず頬が緩む。
ベッドからのっそりと起き上がって、鼻歌交じりに履き慣れたジーパンとTシャツにさっさと着替えた。
カーテンを開けると、昨日と同じく快晴。

眩しい朝の光に手をかざし、目を細めた。

昨日は、とにかく楽しかった。
ウィンドウショッピングもぶらぶらその辺を散歩するなんてこともどこが面白いのか分からんとずっと思っていたが、きららが隣にいるだけで全てが楽しくて、興味深くて、充実して見えた。
ようやく充実した生活を送っていた友人の気持ちがわかった気がする。

素顔のままの彼女の表情や仕草。
子供っぽいところがある天然娘だと認識していたが、感情の一つ一つが豊かで、純粋で。
考えていることがだだ漏れなところがまた可愛くて。

これまで女に一切感じたことのなかったトキメキを初めて体験した。
彼女とのデートのひとコマをまるでプロモーションビデオのように頭の中に再生してみるだけで、心臓が忙しなく動き始める。
これだけで、しばらくの間幸せな気分で過ごせそうだ。

…って。
…ここまでいくと、あの異常な両親のことをとやなく言えないのではないか？
やっぱり妙な嗜好は遺伝する類のものかもしれないと、本気で心配になってきた。

オレはあくまでも正常に彼女を愛したいのだ。
両親から受け継いでいるかもしれない”呪い”を振り払おうと、オレは思い切り頭を振った。
毒されてなるものか。

自室にこもって思い出に浸っていても、腹の足しにはならない。
どうにも腹が減って、バリバリと寝癖だらけの頭をかきながら、両親がいるであろうリビングに顔を出した。
正直あんまり顔を出したくないが、食べ盛りのオレには朝食抜きはきつい。

リビングへの扉をがちゃりと開けると、案の定日当たりのいいリビングのソファには父さんと、父さんの膝の上に乗せられて少女のように頬を赤らめる母さんの姿があった。

いつものようにオレの肩ががっくりと下がり、ため息がこぼれた。

息子が現れたことなど気付くことなくお互いの存在しか目に入っていない2人は、見つめあい、微笑みあっていた。
父さんの手は優しく母さんの頬を撫で、髪に柔らかに絡め、そのひと房にそっと唇を落とし…これが日常だから笑えない。

今までと変わらない光景ではあったけれど、今日は何故かいつもの

呆れモード以外にもどかしいような気持ちが心の中に湧き上がった。
複雑なこの感情を強いて言葉に当てはめるならば…うらやましい、か？

昨日触れた、きららの手の柔らかさ。
髪の柔らかさ。
きっといまだ触ったことのない場所まで、全てが全て柔らかく出来ているのだろう。

少し近づいただけでほんのりと頬を染める少女らしい仕草。
考え事をしたときにくるくると髪を撒きつける、白くて華奢な指先。
溜まらず頬に唇を寄せると、唇から伝わってくる彼女の熱と甘い香り。

くらくらした。

ぎゅっと抱きしめて閉じ込めてしまいたい。
ずっと、ずっと、永遠に。
思う存分、互いの温もりを伝え合いたい。
そして……

…って、オレは朝から何考えてるんだ？

今、オレの隣に彼女はいない。
実現しようにも、出来るわけがない。
…何でいないんだろう？

居てくれたらずっと抱き寄せたまま、キスし続けたってかまわないのに…。

……

……もういい。

認めようじゃないか。

どうやらオレは、両親と同じ道を歩くことになるようだ。

今はっきりと、両親の気持ちを正確にトレースし、理解することができた。

触れたいんだから仕方ない。

離したくないんだから仕方ない。

キスしたいんだから仕方ない。

好きなんだから仕方ない。

理屈ではない。

心がそう訴えるのだ。

だから、仕方がない。

愛する女がそばにいるなら、自然と湧きあがる感情だ。

きららと出会ってしまった今、すとんと心に納まった。

べたべたバカップルになる事が決定事項なら、腹をくくり、いかに自分にとって快適な関係を作るか考える事が優先事項であり、なにより将来を見据えれば効率的でさえある事は間違いない。

小さい頃からうんざりしてきたこの両親の行き過ぎたコミュニケーションでさえ、またとない参考資料だ。
そう考えれば、ありがたいことには違いなかった。
貸し出し禁止の参考資料並に。

この時、オレの両親の偉大さを生まれて初めて知った。

「おはよう」
「あら？ケンちゃんおはよう！」
「ちっ…もうちょっとゆっくり寝てればよかったのに…」

素直な父さんが舌打ちした。

「ちょっと、秀行さん？可愛い息子にそれは酷いんじゃないの？」
「あ、ご、ごめんよ、美和ちゃん。でも2人っきりの時間が…」
「それでもっ！ケンちゃんは二人の愛の結晶なのよ？」
「…美和ちゃん…ごめん、オレ…」

すっかり二人の世界に突入だ。
…前言撤回。
ここまで酷い状態には、やっぱりなりたくない。

「…いいから、父さんも母さんもゆっくりしてて。
朝食は勝手に用意して食べるから」

今までなら嫌な顔をして「そういう事は、息子のいないところでやってくれ」と言っていたオレの反応が明らかに違うことに驚いたのだろう。
二人は目をまん丸にしながらオレを見ていた。
この後に控えているであろう質問の嵐に、少々うんざりする。

やつらが正気に戻らないうちにと足早にダイニングに逃げ込み、冷めた朝食を黙々と口に運んだ。
案の定、2人してダイニングに飛び込んできた。
もちろん、二人の手は親密につながれている。

「ねねっ！ケンちゃん、彼女、出来た？」
「どうなんだっ！？お前のその変わり様、当たりだろ、当たり！」

二人の目が期待にキラキラしてる。
…そんなことしか、悩み事はないのか？
うんざりし過ぎて、こめかみが痛くなる。

「……その内、紹介する」

隠すことでもないのでぼそりと言うと、二人とも飛び上がらんばか

りの勢いで喜んだ。
そして、朝食を全て胃の中に収める頃には、将来生まれるであろう孫の話にまで飛躍していた。

ありえねぇ…。

二杯目のコーヒーを飲みながら、舞い上がっている両親をぼんやりと眺めていると、呼び鈴が鳴った。

ドアホンに付けられたカメラが写す映像には、恐ろしく陰の気を放っている和幸がいた。
「ちょっと待ってねぇ～」と明るく答える母さんの声が、恐ろしく対照的だった。

8―2

いつものように部屋に入ってきた和幸は、やっぱりどんよりと澱んでいた。
うっとおしいと思いつつも、やつの気持ちが分からないわけではないので、沈黙に付き合っていた。
と、和幸が口を開いた。

「…いつからなんだ？」
「…何が？」

分かっていながらすっとぼけてみる。
そうすれば、大概コイツは怒り出すのだ。

「分かってるくせに！おまえさぁ、一体いつからＫＩＲＡと付き合ってんだよっ！
親友のオレにだって一言も言わずにさぁっ！」

涙かよだれか鼻水か、なんだかよくわからない液体で顔をぐちゃぐちゃにした和幸は、まるでこの世の終わりのような甲高い声を出した。
はっきり言って、うんざりだ。

これからしばらくの間続く拷問のことを考えて、心の底からそう思った。

それから１０分ほど和幸は言いたい放題文句を言い、すっきりしたのか台所から持ってきたコーヒーをごくごく飲んでから一息ついた。そりゃそんだけ芝居がかったしみったれな愚痴を言い続けりゃ、のども渇くだろうよ。

「落ち着いたか？」
「…って、なんで落ち込んだ原因作ったやつに慰められなきゃなんねーんだよ！」
「お前、うるさいから」
「冷てぇよなぁ～！ホント！オレの愛するＫＩＲＡ横取りしたくせにっ！」
「…最初っからお前のモンじゃなかっただろ？
お前の場合、ただの熱心なファンだし。
下手すりゃただの間抜けなストーカーだ。
アイツは2年前、出会ったときからオレのだって決まってたんだから、
諦めろ、素早く」
「ひでぇ…」

なんといわれても、アイツは譲れないんだから仕方がない。
大体、オレが側に居るのに、きららが別の男を選べるはずがない。

害虫は少ないにこした事はないし、親友といえども諦めてもらうしかないのだ。
相手が悪かったと思って。

相手がきららじゃなければ、コイツの恋愛になど興味を持つはずもないし、邪魔も味方もしないわけだし。

まぁどっちにしろ、コイツの立ち直りの早さは攻守交替するゴキブリ並だからな。

問題ないだろう。全く。

これだけ叫べば、次の瞬間には立ち直っているに違いない。

それが2年越しの想いだろうと。

「ま、いいか。所詮、手の届かない高嶺の花だったしさ～」

オレの予想を肯定するかのように、和幸はえへらと笑った。

知らず、苦笑が浮かぶ。

馬鹿な子ほどかわいいとは言うが…

「な、な、それよりもさっ！パーティにＫＩＲＡと仲が良かった彼女！

田辺さん…だっけ？」

「田辺が…何？」

「なぁ、彼女さ、誰かと付き合ってんの？賢吾、学校同じなんだろ？

彼女のこと、いろいろ教えてくれよ、な？」

「……」

己を知れ。

オレは和幸にそう言いたかった。

直球勝負しかできない和幸に、田辺さんの相手など…出来るはず、ない。

オレの心の中など知らず、和幸は夢見るように言った。

「実は、以前から彼女のこと見ててさ～、
すっごく可愛いなぁって思ってたんだ～。
なんていうか、彼女、知的で清楚だろ？
しかもすっげぇ魅力的でさ～。
学校でも人気あるんだろうなぁ～。な？そうなのか？」
「まぁ…確かに、人気はあるな」
「やっぱり！
…なぁ賢吾、お前ＫＩＲＡから田辺さんのこと、聞いてみてくれよ？な？
お前にＫＩＲＡ譲ったんだからさぁ～、それぐらい協力してくれるだろ？
なぁ？」

…譲られた覚えなど、全くない。
というか、もともとお前のモンじゃないし。

かなりムッとしたが、しかし、やつがどれほどＫＩＲＡに熱を上げていたかも知っているわけで。
どっちにしろ、田辺さんが相手じゃ和幸の未来は見えているので、ちょっとぐらい協力してやろうという気分になった。
あまりにもこいつが哀れで。

「…聞くだけなら聞いてきてやるよ」
「やたっ！！」

聞くだけの事でもう想いが通じたかのようにはしゃぐ和幸の単細胞さに、乾いた笑みがこぼれた。
コイツ…本当に大丈夫なのだろうか？
気付いたら女に貢ぎすぎて、身包みはがれてるタイプだ。
オレは心の中で手を合わせた。

週明けの月曜日。
いつもより朝早くに家を出たオレは、きららの家の前に立っていた。

とにかく鈍いきららのことだ、一日休みを挟めばこれまでの関係を気のせいにしてしまう可能性も高い。
何事も万全を期すのが、俺のモットーだ。
念には念を入れる。
成功の鍵はこういう細かい気遣いから手に入るものだ。

チャイムを鳴らそうかと手を伸ばした時、「あら、おはよう」と軽やかな声が聞こえた。
案の定、振り向いたらニコニコ微笑む田辺がいる。
どうやら俺の行動は予測済みだったらしい。
そしてその隣には…小学生？

「おい、お前！桃花の同級生か！？

…まさか、また桃花に近づくためにバカなきららを利用しに来たクソ野郎か！？」

…何だ、このクソガキ。
何でクソにクソ呼ばわりされねばならん？
田辺と似たような身長のくせに彼女を背中に隠すように立ちはだかるガキを、俺はまじまじと観察した。
その様子を見て、田辺はころころと笑う。

「だめよ、伊吹君。
この人はね、きららのことが大好きなの。
くせのある人だから、邪魔したら蹴られるだけじゃすまないわよ」
「きららぁっ！？
お前すんげぇ物好きだな！！
あんな陰気ださださモードのきららに惚れるなんてっ！
…まぁ、アイツの場合、普段モードだったところで知れてるけどな！
なんたってバカだし、桃の足元にも及ばない…いてっ！！」

とっさに手が出て、伊吹なるガキの頭を殴る。
両手で頭を押さえ、涙目になりながら睨みつけてくるガキを、本気モードで睨み返した。
怯んで2、3歩後ずさると田辺に背中からぶつかり、そんなガキの両肩に田辺はそっと手を置く。

「もう、伊吹君はまだまだお子様なんだから。
言葉を選んで失礼のないように話せなきゃ、素敵な男性にはなれないわよ？

…私、やっぱり人前で恥ずかしい言葉遣いする人は、好きになれないわ。
それに、私の親友を悪くいう人なんて、言うに及ばずよ？」

田辺が笑顔で優しく諭すと、伊吹は真剣な顔で「わかった！」と頷いた。
それから俺に丁寧に謝ったあと、元気に「行ってきます！」と告げて走っていった。
その後姿を見ながら、俺はずっと疑問に思っていたことを田辺に聞いた。

「…なぁ、あのガキはなんだ？」
「彼は疾風さんの弟で、伊吹君。小学６年生。
未来の私の彼候補で、立派な男性に成長したことが私に認められたら、
プロポーズしてくれるそうよ？」
「所謂、逆源氏計画進行中ってやつか？」
「そうとも言うかしら？」

にこりと笑う田辺の顔を見ると、この状況を喜んでいることがよくわかる。
こんな一癖も二癖もある女に捕まったと知った時、伊吹はどう思うんだろう？
少々気の毒になるが、これはこれでありなんだろう。
当人同士が満足しているならば、周囲からは奇怪な関係に見えても問題ない。

「そろそろきららを起こさないと。
辰巳君もくるんでしょう？
きららのご両親に紹介するわ」

それは願ったりだ。
外堀から埋めることも、有効な作戦だ。
俺は迷わず、田辺の後ろからきららの家の玄関をくぐった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4297x/

MILK☆CANDY

2011年12月18日06時47分発行